

『マビノーギ』研究(11)

——「エルビンの息子ゲレイントの物語」をめぐって——⁽¹⁾

中野節子

はじめに

ウェールズ散文物語集『マビノーギ』に収録された十一編の物語の最後に位置するのが、「フランス風のアーサー王ロマンス」に分類される三編の物語の一つ「エルビンの息子ゲレイントの物語」(‘Chwedyl Gereint vab Erbin’)である。

これらの三つの物語には、それぞれの作品に該当するものとして、いずれも十二世紀フランスの宮廷詩人クレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の韻文詩があり、「ゲレイント物語」に相当する作品は「イレックとイーニッド」(‘Erec et Enid’)である。したがってこの物語が、ノルマン・フランス風のロマンスものの影響を強く受けて成立していることは否定できないところである。特にこの最後の物語「エルビンの息子ゲレイント」においては、生き生きと野生味に溢れたウェールズの語りの要素は、いっそう影を潜め、形式主義の陰りが顕著になっていることが分かる。テーマ的にもいささか分裂気味で要領を得ない印象が残るのも否めない。

現存する完全なテキストは二種類である。一つは、十三世紀の終わり頃から十四世紀の中頃までに書き留められたと考えられる『レゼル

ッフの白い本』(‘Llyfr Gwyn Rhydderch’)のコラム三八五～四五一まで、もう一つは、成立は十四世紀末と想定される『ヘルゲストの赤い本』(‘Llyfr Coch Hergest’)のコラム七六九～八〇九までである。この他に、全体の三分の一強にあたる最初の部分を欠いた、「ペニアルス (Peniarth) 写本6」の四部からのテキストと、より断片的なものとして同写本の三部からのテキストが残されている。これらのテキスト間には大きな違いは見られない。

主人公の若者ゲレイントは、ウェールズの伝説や歴史に再三登場してくる人物で、六世紀に活躍したドムノニア (Dumnonia) の王である。また三題歌 (Triads) では、彼の名は三人の「海の旅行者たち」(‘Seafarers’)の一人として挙げられていたり、詩人 (bard) セワルッフ・ベン (Ilywarch Hen) のエレジーにおいては、ソングボルス (Llongborth) の戦いで、アーサーの旗の下、サクソン人たちと勇敢に戦った勇者としても登場している。いずれもウェールズの英雄のイメージが濃厚に残っていることが分かる。⁽²⁾

「エルビンの息子ゲレイント」の物語⁽³⁾

カエル・スイオン・オン・ウスタ (Caer Llion on Usk) に宮廷を設けることが、アーサーの慣例になっていた。そこで七回のイースターと五回のクリスマスが続けて過ごしていた。あるとき、聖霊降誕節にその地で宮廷を設けることがあった。というのも、彼の領地の中でカエル・スイオンが、海からも陸からも、近づくのに最も便利なところに位置していたからだ。アーサーは、臣下の九人の正當な王たちを周りに呼び寄せていた。彼らと共に伯爵や男爵たちもまた、やって来た。何事もない平穏なときには、この人たちが、このような祭日の常客となっていたからである。カエル・スイオンで宮廷を設けているときには、十三の教会堂でミサをあげるようになっていた。それらは、次のように定められていた。すなわち、まず最初にアーサーと王たちとその客人たちのための教会堂、次にグウェンヒヴァル (Gwenhwyfar) と侍女たちのための教会堂、三番目に執事と家令たちのための教会堂、四番目にはフランクのオディア (Odiar the Frank) と役人たちのための教会堂であった。その他九つの別の教会堂が、それぞれの軍団の九人の長の間に別々に設けられ、中でもグアルッフメイ (Gwalchmei) が最大の長となっていた。というのも、武術、生まれ共に他の九人の軍団長の誰よりも優っていたからである。ここに挙げたもの以外には、一つとして別の教会堂は設けられなかったと言つてよい。

強握力のグロイルド (Glewlyrd Mighty-gras) が、アーサーの門番長を務めていた。しかし彼の役目は、三つの主な祝祭日だけに限られ、その他のときは、彼の臣下の七名の者が、役目を分担していた。すなわちグリン (Gryn)、『ペンギンオン (Pennington)』、『サイスゲミン (Llaesgymyn)』、『ゴギヴリフ (Gogvwlch)』、『昼夜目が利く猫目のグルズネイ (Gwrddnei Cat-eye)』、『ドナムコディズ (Dren son of Drenhidydd)』、『クリストヴ』、『イネズの息子クリスト (Clust son of Clust-

feinydd) たゞで、この男たちは皆アーサーの戦士であった。

聖霊降誕節の火曜日、王が宮廷で席に着いていると、見よ、背の高い亚麻色の髪の若者が入つて来た。短い上着と絹のうね織りの外衣をまとい、首には金の握り手の付いた剣を下げ、足にはコードヴァン皮でできた短いブーツを履き、アーサーの面前に進み出た。「御機嫌よろしう、殿さま」と彼は呼びかけた。「神の御加護があらんことを。よく来られた。何か新しいことでもあるというのかね」とアーサーが言った。「そうなのです、殿」と男が答えた。「ところで、お前が誰か分からぬのだが」とアーサーが言った。「これはまた驚きました。あなたさまの森番ですよ。ディーン (Dean) の森を守るマダウグ (Madawg) という者で、トルガダルの息子 (Son of Twrgadarn) じやうござす」。して、その知らせとは？」とアーサーが言った。「申しましよう、殿」と男が答えた。「森の中で、一頭の鹿を目にしたのです。こんな鹿は、今までに見たこともございません」。さて、それはどんな代物なのだね」とアーサーが尋ねた。「今までに目にしたこともないとは？」。「真っ白い鹿でございます、殿。このように優れた外見と態度の鹿は、そうあるものではございません。ご意見を伺いたくて、こうして参上いたしましたのでございます。この鹿を如何致したらよろしうございませう？」。「最も相応しく処遇いたそう」とアーサーが言った。「明日の朝早く、出かけていって狩りをするのだ。今夜の中に、それぞれの宿舎の者たちに、そしてリヴウェルス (Rhyferys) (この男がアーサーの狩猟長であった) とエリブリ (Eliith) (この男がアーサーの馬丁長であった) に、そしてまたそれ以外の全ての人々に、そう伝えるのだ」。このように事が運ばれることになり、小姓が先頭に立ったのだ。するとそのとき、グエンヒヴァルがアーサーに言った。「殿さま」と彼女が言った。「その若者が話していた鹿を狩るのを、明日見に行く許可を、わたしにもいただけませんか？」「差し上げようよ、よろこんで」とアーサーが言った。「それでは参ります」と彼女が言った。するとグアルッフメイが言った。「殿。狩りにやって来た男が、狩り採った獲物の首を自分の望む者に与える許可をなさらなくてはなりません。自分の愛する婦人に与えるのか、それとも自分の友が愛する者へ捧げるのかということです。騎馬で来たらいのか、それとも徒歩でやって来るのかも決める必要

「があります」と彼が言った。「よこんで、そうすることにしよう」とアーサーが言った。「明日の朝、皆の狩りにゆく用意が整わないとしたら、執事が咎められることになるだろうよ」。

それからその晩、一同は歌や余興や物語で充分に楽しみ、たっぶりもてなされ、もう眠ったほうがよいと判断されたとき、就寝した。

翌日の朝になると、皆目を覚ました。アーサーは寝所を守る侍従たちを呼んだ。いつもの四人の騎士たちである。すなわち、門番のガンドウイの息子カデリエイス (Cadwrieth son of the Porter Gandwy)、ベッドウィールの息子アムレン (Amhren son of Bedwyr)、アーサーの息子アムハール (Amhar son of Arthur)、そしてカステニンの息子ゴレイ (Goren son of Custennin) である。男たちはアーサーの許へやって来て挨拶し、勢ぞろいした。アーサーは、グエンヒヴァルが目覚めないのを不思議に思った。ベッドをおこさせた素振りもない。人々は彼女を起こそうとした。「起こさずともよい」とアーサーが言った。「狩りを見にゆくより、眠っていた方がよいようだから」。

それからアーサーは出かけて行った。すると二つの角笛が聞こえてきた。一つは狩猟長の住居の近くから、そしてもう一つは執事長の住居の近くからだった。それぞれの軍団からの総勢がアーサーの許に集まり、一同揃って、森へと向かった。ウスク中から人々が森へ集まり、公道を離れ、高くそびえた土地を通過して、揃って森へやって来たのだった。

アーサーが宮廷から出て行ってしまった後で、グエンヒヴァルが目覚まし、侍女たちを呼んで身繕いを整えた。「皆の者」と彼女が言った。

「昨晚、わたしは狩りを見にゆく許可を取っていたのだよ。誰か一人馬舎へ行って、婦人用に相應しい馬を連れて来ておくれ」。一人の侍女が出て行って見ると、そこにはたった二頭の馬が残っているばかりだった。そこでグエンヒヴァルと侍女の中の一人が、この二頭の馬に乗って出かけて行った。ウスクを通り抜け、男たちと馬たちの足跡をたどって歩みを進めた。このようにして二人が旅を続けていると、ひどく大きな物音が聞こえてきた。後を振り返って見ると、ヤナギの木のような灰色をした、巨大な馬に乗った人の姿が目に入ってきた。乗っているのは、王者の貫禄をもつ、亜麻色の髪とむき出しの脚をした若い騎士で、脇には金の柄の付いた

剣を差し、絹の錦織の上着と外衣を身にまとい、足にはコードヴァン皮製の短いブーツを履き、四隅に金色の林檎の縫い取りをした青紫のマントを羽織っていた。馬は上機嫌で、元氣良く、活気に溢れ、生き生きとした細かい歩調で歩いていた。騎士はグエンヒヴァルの方を眺め、挨拶をした。

「神のお恵みを、グレイント (Gwein)」と彼女が答えた。「一目見たときから、あなたであることは分かりましたよ。よくいらっしやいました。ところで、どうして主人と一緒に、狩りへ行行らなかつたのですか?」。「いつ出発なさつたのか分からなかつたからです」。「わたくしはまた、何故主人がわたくしに知らせずに、出かけてしまつたのか不思議でたまらないのです」と彼女が言った。「そうですか、奥様。わたしの方は寝坊していて、いっお出かけになつたのか分からなかつたのですが」。「それにしても、ほんとうに良い旅のお仲間ができましたこと」と彼女が言った。「全地をめぐって探しても、あなたより他に、わたしの良い連れとなつて下さる方はおりませんまい。あの者たち同様、わたしたちも楽しみますよ。彼らが奏でる角笛の音も聞こえてきますし、放たれる犬の声も、また獲物にかかるときの声も聞こえますもの」。

彼らは森のはずれまでやって来て、歩みを止めた。「ここからなら、大がいつ放たれるか分かります」と彼女が言った。すると大きな物音が耳に入ってきた。物音がする方に目をやると、力強く立派な馬に乗った小人の姿が目に入った。小人の手にはムチが握られていた。小人の側には、誇らしい足並で進む美しい青白い馬に乗り、絹の錦織の、王者に相應しいようなローブを身にまとつた婦人の姿があり、彼女の脇には、大きな土色の戦馬に跨がり、馬も人も重そうに輝く鎧で武装した騎士の姿があった。こんなに大きな人も馬も見たことはないほどであり、三人はしっかりとまゝまゝ歩いて来たのだった。

「グレイント」、「グエンヒヴァルが言った。「あそこにいる大きな騎士が誰か分かりますか?」。「いいえ、分かりません。あの大きな鎧で、顔も表情も遮られて見ることができないのです」。「侍女よ、さあ行って」とグエンヒヴァルが言った。「あの小人に、騎士が一体誰なのか尋ねておくれ」。侍女が小人に会うために出かけて行った。彼女がやって来るのを見ると、小人は歩みを止めて待っていた。侍女は小人に尋ねた。「あ

そのいらっしやる騎士は、どなたさまですか？」と彼女が聞いた。「あなたには、教えてやるわけにはゆかないね」と小人が答えた。「まあ、礼儀というものをわきまえてはいないのですね」と彼女が言った。「教えていただけないのなら、自分であの方にうかがいますわ」。「そういうわけにはゆかない。断じて申し上げるが」と彼が答えた。「どうしてですか？」と彼女が聞いた。「あなたがわたしのご主人様には、相応しくない者だからさ」。そこで侍女は馬の頭を騎士の方に向けた。すると小人は手にしたムチで彼女の顔と両目を討ち据えたので、どっと血潮が吹き出した。侍女は打たれた痛みで、グエンヒヴァルのところに戻ってきて、訴えたのだった。「まったく不法な奴だ」とグレイントが言った。「わたしが çıkて行って、あの騎士が誰なのか聞いて参ります」。『そうして下さい』とグエンヒヴァルが言った。

グレイントは小人のところへやって来た。「あの騎士は誰なのかね？」と彼は尋ねた。「教えるわけにはゆかないね」の小人が言った。「それなら、自分で聞いてみよう」とグレイントが言った。「絶対に、そうはさせないぞ」と小人が答えた。「わたしのご主人様に声をかけるような地位にある者とは思われぬからだ」。「あなたのご主人と対等な身分にある方とも、これまで何度も話してきたぞ」とグレイントは言い、馬の首を騎士の方に向けた。すると小人が追ってきて、侍女にしたのと同じところに一撃をくらわせ、吹き出した血潮がグレイントのマントを汚した。グレイントは剣の柄の手をかけたが、しばらく考え、もし鎧も纏わないでこの小人を殺したりしたら、あの鎧で武装した騎士に見くびられ、仇を返したことはならないと思ったのだった。そこでグエンヒヴァルのいるところに戻って来た。

「ほんとうに、賢明に、的確に判断なされたこと」と彼女が言った。「お許しがいただけたら、後ほど再び、あの者の後を追うことにいたしましたよ。やがてはあの者として、私が借りるかまたは保証金を積んで、鎧を身に纏うことも可能になる人里にやって来るはず。そこで私も堂々と戦うことが出来ましょうから」。「それではお行きなさい」と彼女が言った。「けれど、十分に身繕いを整えるまでは、あの騎士に近づき過ぎてはなりません。あなたの様子が分かるまではとても心配です」。『もし私に命があれば、』と彼が言った。「明日の夕方までは、何の知らせもないでしょう。逃げることができたらの話ですが」。『そう言う』とグレイントは出かけて行った。

彼らが進んで行ったのは、カエル・スイオンの宮廷の下方にある道で、ウスクの浅瀬を渡り、高く、寂しく、美しい平坦な土地を通り、ついに城壁に囲まれた町へやって来た。町の外れに、砦と城があるのが目に入った。その騎士が町を通ると、それぞれの家から人々が挨拶し、騎士を歓迎した。グレイントは町にやって来ると、誰か知った者がいないか一軒ずつ覗いてみた。しかし誰一人知っている者はおらず、鎧を借りたり、保証金を出して貸してくれる者もないことが分かった。どの家もみんな、人と馬で一杯になっており、楯は磨かれ、短剣は研がれ、鎧は整備され、馬の手入れがなされていた。

騎士と婦人と小人は町の中の城へと向かった。城の人々はそろって彼らを歓迎し、城壁、城門とどこへ行っても、彼らに挨拶しようと熱心に首を延ばしていた。グレイントは立ち止まり、この城の中を歩き回れるかどうかを見定めていた。留まることが分かり周りを見回すと、町から少し離れたところ、朽ち果てた古い宮廷があり、中に崩れた大広間があるのが目に入ってきた。この町には知る人とならなかった、この古い宮廷へと向かい、そこへ来てみると二階に部屋が一つ見えるばかりであった。その部屋から大理石の階段が下っているのが見えた。階段の上には、一人のボロをまとった白髪の人が座っていた。グレイントはこの人を見つめた。その白髪の人が彼に言った。「お若い方」と白髪の人が言った。「何を考えておられるのですか？」「思いめぐらしていたのです」と彼が答えた。「というのも、今夜どこに泊まろうか決めていないからです」。「ここにお泊まりなさい、殿」と彼が言った。「出来るかぎりのお持てなしをいたしますよ」。

「そういたします」と彼は答えた。「神の報いがありますように」。そこで歩みを進め、白髪の人が先導して大広間へ入って行った。大広間へ入ると、そこに馬を置き、彼と白髪の人とは二階の部屋へと上がって行った。部屋の中には、とても年をとった婦人が、古ぼけた衣装をまとって、クッションの上に座っているのが見えた。若く華やかなりし頃は、さぞかし美しかっただろうと思われるような婦人であった。彼女の側には一人の娘がお

り、とても古ぼけ、糸目も露になった衣とマントを身にまといているのが分かった。そんなふうな外見にかかわらず、その美しき、優美さ、そして感じのよさにおいて、それ以上の娘はいないように思われた。白髪の人がこの娘に言った。「お前をおいては、この若いお方の馬の世話をする者もないようだ。」「最高の御世話を、」と彼女が言った。「この方と馬にして差し上げます。」そこで娘は、若者のブーツを脱がせ、馬にはワラとコムギを与えた。そして前のように大広間へ向かい、二階の部屋へと戻って来た。すると白髪の人が娘に言った。「町へ行っておいで」と彼が言った。「そして食べ物と飲物、手に入る最高のものを買い求め、ここに持って来るのだ。」「よろこんでそういたします。ご主人さま」と娘が言った。彼女は町へ出かけて行った。彼女が町に行っている間、二人は話しを交わしていた。すると、見よ、娘が下男と共に戻って来た。男の背中には、買い求めた蜂蜜酒で一杯にされた瓶と、若い雄牛の肉の塊がクォーター担がれていた。娘の手には白パン、そしてマントの中には一片の肉が抱えられていた。娘は二階の部屋にやって来た。「これが手に入った食べ物の全てでございます」と彼女が言った。「それで十分です」とゲレイントが答えた。そして肉の調理がされたのだった。食事の用意が整うと、一同席に着いた。ゲレイントが白髪の人とその妻の間に座を占めた。娘が給仕を務めた。そして彼らは飲んだり食べたりしたのだった。

食事が済むと、ゲレイントは白髪の人と親しく話を始め、自分が最初に入って行った宮廷の元の所有者はあなたですかと尋ねた。「たしかにこの私が、」と彼が答えた。「あの宮廷を設立し、あなたがごらんになった町と城とを所有していた者なのです。」「それは残念なことです。どうしてそれらを失ってしまうことになったのですか？」とゲレイントが言った。「それらと一緒に、大きな領地までなくしてしまいました」と彼が答えた。「それはこういうわけだったので。私には一人の甥がおりました。兄の息子です。彼の領地と私自身のものとを、私が取ってしまつたのです。甥に力ができてきますと、自分の領地を主張してきました。しかし私はそれを拒んだのです。すると戦いを挑んで来て、私の持っている全てのものを奪い取ってしまったのです。」「そうだったのですか」とゲレイントが言った。「ちょっと前にこの町に入ってきた、騎士と婦人と小人たちに

ついて、知っていることをお聞かせ下さい。そして何故皆が武器の用意をしているのかも教えていただきたいのです。」「お話いたしましたよ」と彼が答えた。「あの若い伯爵が、明日行う試合のためのものなのです。向こうの草原に二本の支柱を立て、その上に銀の小枝を載せ、その小枝に一羽のハイタカを載せるのです。その鷹をめぐって、トーナメント試合が行われるのです。あなたがご覧になった人々も、馬も、武器の類いも皆そのトーナメントにやって来た一団なのです。それぞれ最愛の婦人を連れていて、そういう婦人のいない者は、あの鷹をめぐっての槍試合の出場資格はないのです。あなたがお会いになった騎士というのは、二年にわたって鷹を獲得した者です。三度勝ち得たなら、それ以後は毎年鷹が彼に贈られることになっています。そうしたらもう自らここにやって来なくとも、以後永遠に『鷹の騎士』と呼ばれることになるのです。」

「良き人よ、」とゲレイントが言った。「私とアーサーの奥方グエンヒヴァルさまの侍女が被った傷について、あの騎士をどうしたらよいとお考えですか?」そしてゲレイントは、自分の受けた傷の話はこの白髪の人にしたのだった。「ご意見を申し上げるのは難しいことです。あなたは特別の御婦人も娘も連れておいでではないので、あの方と槍試合をすることもできません。ここにある私の武器でよかつたら、どうぞ何なりとお使い下さい。あの方に勝ちたいとお思いなら、あなたの馬よりも私のものの方がよろしいでしょう。」「良きお方、」とゲレイントが言った。「神が報いて下さるように。あなたの武器と私の馬があれば、もう十分です。馴れておりますから。ところで、あそこにいらっしゃるあなたの娘さんに、明日の定められた時間が来たら、誓いを立てさせていただくことをお許し願えませんか? 生きてトーナメント試合から戻って参りましたら、私の財産と愛を、命あるかぎりその娘さんに捧げましょう。もし、私が戻る事が出来なかったなら、娘さんは今までと同じように、清らかなままでいられますよ。」「よろこんでそういたします」と白髪の人が言った。「そうお決めになったのなら、明日の定刻までに武器と馬の用意をしなければなりません。というの、その時刻になったら、あの鷹の騎士が宣言するからです。騎士は自分の最愛の婦人に、鷹を取るようと言うでしょう。というの、その鷹は彼女に最も相応しいと思われるからです。『貴方がそれ

をおとりなさい』と騎士は申すでしょう。『昨年も、また一昨年もそうでした。もしそれを拒む者がいたら、私が力づくで、貴方のためにそうして差し上げます』。そのために、と白髪の人と言った。「あなたはその日、そこにいなければなりません。そして私たち三人もあなたと一緒に参ります」。このように事は決まり、夜もほど良い時間になった頃、彼らは床に就いたのであった。

当日、決められた時刻に、四人は揃って草原の土手に立った。すると鷹の騎士が布告し、自分の愛する婦人にその鷹を取るように告げた。「取ることまかりならぬ」とゲレイントが言った。「ここにあなたより、もっと美しく、ふさわしく、高貴の生まれの御婦人がいらっしやる。この方がそれを欲しておられます」。その方のために、あなたがそうお望みなら、進み出て私と槍試合をしていただく。ゲレイントは草原の端に歩み出た。装備された馬と、重く錆びついて、何となく奇妙な鎧を身に着けていた。二人は各々めがけて突進した。両者の槍は折れ、第二、第三の槍も折れ、全ての槍を折って戦った。鷹の騎士の優勢を知ると、伯爵とその家来たちが一斉に拍手喝采し、白髪の人と妻と娘の心は沈んだ。槍が折れるたびに、白髪の人がゲレイントに次の槍を準備し、小人が鷹の騎士の槍を準備した。それから白髪の人がゲレイントのところにやって来ると、「殿、」と言った。「ご覧なさい。ここに私が騎士に叙せられた日に、手にした槍があります。その日から今日に至るまで、折ったことはありません。とても良い切っ先が付いています。これほどの槍はないでしょう」。ゲレイントはこの槍を取り、白髪の人に感謝した。すると、見よ、小人が自分の主人のところに走り寄り、槍を差し出した。「ここになかなか悪くない槍がありますぞ」と小人が言った。「これを使うかぎり、その攻撃に耐え得た者がなかったことを思い出すのです」。『神に誓って、』とゲレイントが言った。「突然の死が私の命を奪ってしまわないかぎり、もう奴はおまえの助けを必要とはしなくなるだろうよ」。十分に距離をとり、ゲレイントは馬に拍車を当てて、用意はいいかと声をかけながら、騎士をめがけて走り、鋭く貫く、致命的な一撃を相手の楯の最も強靱なところに当てた。その結果楯は碎け、激しい一撃の前に鎧は裂け、騎士の帯は破れ、鞍もろと

もに馬の尻がいの部分から地面へ放り出されてしまったのだ。ゲレイントは素早く馬から降りると、怒りで全身を燃やして剣を引き抜き、ここぞとばかりに満身の力を込めて騎士に切りつけた。騎士もまた身を起し、ゲレイントめがけて別の剣を抜いた。それぞれの鎧は当たって碎け、汗と血潮で目の光も曇ってしまうまで、両者は剣を掲げて、徒歩で戦った。ゲレイントが優勢にたつと白髪の人と妻と娘が喜び、騎士が優勢にたつと彼を取り巻く一団が狂喜した。ゲレイントが激しい一撃をくらうと、白髪の人が近くに駆け寄って言った。「殿、」と彼が言った。「あの小人から受けた痛手のことを思い出すのです。その傷とアーサーの奥方グエンヒヴァルさまへなされた痛手のために、ここへ行らっしゃたのではないのですか？」するとゲレイントの心に小人の言葉が思い出され、彼は力を奮い立たせて短剣を振り上げると、騎士の頭上めがけて激しい一撃を浴びせかけた。その結果騎士の兜は完全に壊れ、肉も皮膚も破れて、傷は骨まで達するものになった。騎士は膝を落とし、手からは剣を投げ出してゲレイントに命乞いをした。「もう遅すぎたかもしれませんが、」と彼が言った。「私の偽りの思い込みと誇りも、命乞いをすることを許してくれるでしょう。もし罪を贖うための神との平和を取りつける猶予と、司祭と話し合う暇をいただけないとしたら、命乞いをしたとて甲斐のないことです」。『条件付きで、命乞いを認めましょう』とゲレイントが言った。「アーサーの奥方、グエンヒヴァルさまのところに行くのです。そして小人によって与えられた、あの方の侍女に対する痛手の償いをするのです。私の方へあなたと小人によってなされた痛手の償いは、あなたに加えた私の仕打ちで十分です。グエンヒヴァルさまのところに行くまでは馬から降りず、アーサーの宮廷であの方の意思にしたがって償いをしてください」。『よろこんでそういたします。ところであなたは何方なのですか？』と彼が尋ねた。「私はエルビンの息子ゲレイントという者です。あなたもまたお身分をお聞かせください」。『私はニッツの息子エデルン (Edern son of Nudd) という者です』。それから彼は馬に身を乗せ、真っ直ぐにアーサーの宮廷に向かい、彼の愛する婦人がその前を進み、小人が彼に付添い、深い嘆きの中に歩みを進めた。(彼の話というのはこれまでである。)

それから若い伯爵と彼の軍隊が、ゲレイントのところへやって来て挨拶し、一緒に城へ来てくれるようにと招いた。「私は結構です」とゲレイントが言った。「昨晚泊めていただいたところに、今夜も行くかと思っておりますので」「お招きできないとしたら、あなたが昨晚お泊りになったところに、出来るかぎりの準備をさせていただきます。あなたのためにお風呂を用意させていただきますので、お疲れを落とさせていただきます」「神が報いて下さいますように」とゲレイントが言った。「それでは、私の宿舎に行かせていただきます」。このようにして、ゲレイントとインウィル(Invil)卿と彼の妻と娘は帰って来た。二階の部屋に上がると、若い伯爵の執事たちが彼らに仕えるためにやって来て、部屋を整え、ワラを用意し、火を起し、しばらくすると風呂の用意も整った。ゲレイントは風呂に入り、髪を洗った。

そこへ、四十人の正式な騎士の一人の若い伯爵が、彼自身の家来たちとトーナメントの客人たちと共にやって来た。ゲレイントが風呂から上がると、伯爵は食事をとるために、大広間へ来てくれるようにと言った。「インウィル卿はどこにいらっしゃいますか?」と彼が尋ねた。「それから奥方と娘さんは?」「二階の部屋におられます」と伯爵の執事が答えた。「伯爵さまが持ってきた衣装を着ているところで」「娘さんには、どんな衣装も与えないで下さい」とゲレイントが言った。「アーサーの宮廷に来るまでは、シャツとマント以外のものは身につけないでほしいのです。というのは、どんな衣装を着ておられようとも、グエンヒヴァルさまが手ずから彼女を装わせることになるでしょうから」。そこで娘は新しい衣装を身につけることはなかったのである。

それから一同はそれぞれ大広間に入って来て、手を洗い、食事のための席に着いた。席の順序は次のようであった。ゲレイントの脇には若い伯爵が座り、その次にインウィル卿が、またゲレイントのもう一方の側には娘とその母親が座り、それぞれの者が地位に従って席を占めた。一同は食べ、非のうち所のない給仕と、心温まる料理の数々が出された。皆は語り合い、若い伯爵は明日は是非とゲレイントとを招待した。「とても無理です。神に誓って」とゲレイントが言った。「明日はこの娘と一緒に、アーサーの宮廷に旅立つつもりなのです。インウィル卿は、もう既に長いこと貧困と良

心の悩みに苦しんだと思われれます。私が参りますのは、主としてこの方の地位を確立するためなのです。「殿、」と若い伯爵が言った。「インウィル卿が領地をお持ちでないのは、私のせいではないのです。「確かに、」とゲレイントが言った。「私が突然死んでしまわないかぎり、あの方を領地がないままにしておくわけにはゆきません。「私とインウィル卿の間の長いことの不和のことでしたら」と彼は言った。「よろこんであなたの助言に従いましょう。あなたは不公平なことにはなざらないと思えますから」。「正式に、」とゲレイントが言った。「当然彼のものと認められるものにかぎってそうしてあげてほしいのです。領地を失って以来、今日に至るまでの損失の分です。「あなたさまに免じて、よろこんでそういたしましたしょう」と伯爵が言った。「そうですか」とゲレイントが言った。「それでは、ここにいる方々のうちで、インウィル卿の家来であられる方は、どうぞこの場で忠誠のしるしを贈って下さい」。そこで全ての人がそのようにして、総てが整えられたのだった。そして彼の城と町と領地とがインウィル卿に返され、持っていた装飾品に至るまでの全てが元に戻されたのだった。

それからインウィル卿がゲレイントに言った。「殿、」と彼が言った。「ここにあなたがあのトーナメント試合の日、誓約を立てて下さった娘がおり、あなたの御命令をまっております。どうなりとご自由になさって下さい。「アーサーの宮廷に着くまでは、そのまま置いてほしいのです。アーサーとグエンヒヴァルさまにこの娘のことを任せようと思うのです」。そして翌朝、彼らはアーサーの宮廷に向けて出発して行ったのである。(ゲレイントの話はここまでである。)

これは、どのようにしてアーサーがその鹿を狩りで討ち取ったかというお話である。人間と犬たちのために、狩猟小屋が設けられ、犬が放たれた。最後に放たれた犬は、アーサーの愛犬だった。名前はカヴァス(Caval)といった。この犬は他の全ての犬たちを尻目に、鹿を追い立てた。そして第二回目の追跡で、鹿はアーサーの狩猟小屋へと向かった。そこでアーサーがねらいを定め、力一杯にその首を切り落とした。それからとどめが刺されたという合図の角笛が吹き鳴らされた。そして一同が一箇所に集まってきた。するとカデリエイスがアーサーのところに来て言った。

「殿、」と彼は言った。「あそこにグエンヒヴァルさまがいらっしゃいます。侍女を一人お供に付けているだけでございます。」「それならおまえから頼んで、カウの息子ギルダス (Gildas son of Caw) と宮廷の役人を全て供につけて、グエンヒヴァルを宮廷へ帰すのだ。そこで一同は言われたとおりにした。

それからそれぞれ出かけて行き、一体誰にその首を献呈すべきかを話し合った。ある者は自分の最も愛する婦人にそれを献じようとし、またある者は自分こそが最も愛する婦人に献呈したいのだと主張した。このようにして、それぞれの家の者や騎士たちが、しきりにその首を欲しがったのである。こんな風にながら、一同揃って宮廷へと戻って来たのだった。

アーサーとグエンヒヴァルは、首をめぐる論争を耳にし、グエンヒヴァルがアーサーに言った。「殿、」と彼女が言った。「その鹿の首に關しては、わたくしに考えがあります。エルビンの息子ゲレイントが、出かけて行った用向きを終えて帰って来るまで、首の献呈は待っていたでございまして。そしてグエンヒヴァルは、アーサーに、彼の用向きの理由を説明した。「いいだろう、よるこんでそう致そう」とアーサーが言った。そしてそのように成されたのだった。

朝になると、グエンヒヴァルは、城壁の上に見張りの者たちを立てて、ゲレイントが帰って来ないか見守らせた。昼を過ぎた頃、彼らは馬に乗った小さな人の姿を見つけた。その後ろに、馬に乗った婦人か娘のような姿が続いているように見えた。彼女の後ろには、大きな堂々とした騎士が、首を垂れ、ひどく気落ちした様子で進み、身にはよれよれになった惨めな鎧を纏っていた。一行が門の近くまでやって来る前に、一人の監視人がグエンヒヴァルのところへやって来て、自分たちが見た人たちの様子とその風体とを説明した。「一体誰なのか分かりません」と彼が言った。「分かっていますよ」とグエンヒヴァルが言った。「その人こそ、ゲレイントが追って行った方ですよ。自らすすんでここにやって来られたとはとても思われないけれど、ゲレイントがその人を打ち負かしたのだとしたら、侍女が被った痛手は、十分に晴らしてくれたと思われます。すると、見よ、門番がグエンヒヴァルのところにやって来た。「奥方さま、」と彼が言った。「門のところに一人の騎士が来ております。このようにひどい有

り様をした者を見たことはございません。ポロポロになった鎧を身に纏い、血潮の色でその元の色も分からなくなっているほどです。」「一体誰であるか分かりますか？」と彼女が尋ねた。「はい、分かりました」と彼女が答えた。「ニッツの息子エデルンという者でございます」と彼は言った。

「その者に面識はありませんが」。するとグエンヒヴァルが、彼に会うために門のところまでやって来た。男は中に入った。その様子を見ると、彼女の心は悲しみで一杯になるのだった。男は小人を伴ってはいなかった。余りに礼儀をわきまえていなかったからである。それからエデルンがグエンヒヴァルに挨拶した。「神の栄光がありますように」と彼女が言った。

「奥方さま、」と彼が言った。「最も優れた、また最も勇敢な、エルビンの息子ゲレイントからのご挨拶をあなたさまにお届けいたします。」「あなたが、あなたに会ったとおっしゃるのですか？」と彼女が尋ねた。「はい、そうです」と彼が言った。「私が優位に立ったものではありません。そうではなく、負けたのはあの方ではなくこの私なのです。奥方さま、ゲレイントからあなたさまへの挨拶を送ります。その挨拶の中で、あの方は私に、この地にやって来て、この小人があなたさまの侍女に与えた痛手に對するお許しを願うようにと申されました。ご自分の被った痛手に關しては、私に對して与えた痛手に免じて、許してやろうとおっしゃいました。

というのも、私の命が危うくなっているとお考えになったからです。力強く説得力にあふれ、意思の強固な戦士の力をもって、あなたさまのいらっしゃるこの地にやって来て、正義を求めるようにと申されたのです。奥方さま。」「ああ、騎士よ。一体どこであの方に打ち負かされたのですか?」「今はカエルディフ (Caerdyff) と呼ばれている町の中で、鷹をめぐっての槍試合のときでございます。三人の者を除いては、彼には供の者としておりませんでした。その三人もとても見すばらしい、ひどい身なりをしておりました。ひどく年をとった白髪の人と年老いた婦人、そして古くよれよれの衣服を身にまといはいますが、若く美しい娘です。その娘への愛の請願を立てて、鷹をめぐっての試合に挑戦してきたのです。そしてその娘の方が、ここにいる私の婦人よりずっと鷹を得るのに相応しいと宣言したのです。そんなわけで、私たちは槍試合を始めることになったのです。そしてご覧のように、奥方さま。私はこんなふうにされてしまったのです。」

「騎士よ」と彼女が言った。「グレイントはいつ、ここに到着するとお思いですか?」「明日いらっしやると思います、奥方さま。そして娘もやって来ますよ」。

それからアーサーがやって来て、騎士が彼に挨拶した。「神のお守りがあるように」とアーサーが言った。そして長いことじっと見つめ、こんな風体にはひどく驚いた様子だった。そしてこの騎士が誰であるか分かったように、尋ねたのであった。「あなたはニッツの息子エデルンだね?」「はい、そうです。殿」と騎士は答えた。「大変な目にあい、このような耐え難い傷を負ってしまいました。そしてアーサーに自分の不運を語ったのだった。「ああ、」とアーサーが言った。「聞くところによると、グエンヒヴァルがあなたに哀れみをかけてやってもよいと思われる。」「どんな哀れみをかけてやるとしても、殿」と彼女が言った。「よろこんでそういたしますわ。と申しますのも私に加えられた侮辱はあなたさまへのものと同じこと。辱めもまたそのように心得ていますから。」「このことに對する最も良い処置は、」とアーサーが言った。「この者がはたして生きながらえるものかどうか、養生させてみるのだ。もし生きられる望みがあるものなら、そのとき宮廷の貴族たちが定めるように、償いをさせればよい。そのように取り計るように、保証を取っておきなさい。侍女に對する侮辱を償うには、エルデンのような立派な若者の死ということで、十分過ぎると思われる。」「それで十分でございます」とグエンヒヴァルが言った。それからアーサーが自ら、その若者のための保証に立ち、スウィールの息子クラドク(Cradawg son of Lyr)、セナウグの息子グアング(Gwallawg son of Llenawg)、ニッツの息子オウエイン(Owein son of Nudd)、グアルッフメイ、そしてその他多くの者が保証に加わったのである。そしてアーサーはモルガン・テッド(Morgan Tud)を呼び出した。アーサーの主治医である。「ニッツの息子エデルンを連れて行きなさい。彼のために部屋を用意し、私が怪我をしたときのように、十分に手当てをしてやるがよい。若者が静かに休めるように、おまえと治療に当たる弟子たち以外には、誰も中に入れてはならない。」「よろこんでそういたします、殿」とモルガン・テッドは言った。すると執事が言った。「この娘は如何致しませう?」「グエンヒヴァルと侍女たちのところに預けるがよからう」とア

ーサーが答えた。(彼らの物語はここで終わる)。

朝になると、グレイントが宮廷にやって来た。グエンヒヴァルは彼の来るのを見逃すまいと、見張りの者たちを城壁の上に立てていた。見張りの者がグエンヒヴァルのところに来て告げた。「奥方さま、」と彼が言った。「グレイントさまと一緒に、一人の娘が見えたようです。馬に乗っていらっしやるのですが、どうやら歩くときのようなお召し物を着ていらっしやいます。娘さんの方は、真っ白な、リネンのような衣装を着けておられるだけのようです。」「さあ、侍女たち。グレイントを迎える準備をして下さい。よろこんで歓迎して差し上げましょう。グエンヒヴァルはグレイントと娘を迎えるために出かけて行った。グレイントは、グエンヒヴァルのところへ行き、挨拶した。「神さまのお守りがありますように、」と彼女が答えた。「よく戻って行らっしゃいました。何と実り豊かな、祝福と名譽を受けるにふさわしいような冒険をなさいましたこと。神さまがご苦労に報いてくださいますように」と彼女が言った。「というのも、あなたはほんとうに十分に、私に報いて下さいましたもの。」「奥方さま、」と彼は言った。「あなたのご意志に従って、償いをするのが私の望みでございます。ここにあなたへの侮辱を晴らすためのきっかけを作ってくれた娘がおります。」「ああ、」とグエンヒヴァルが言った。「神さまが必ず彼女を歓迎してくださいませ。そうならないことがありませんか。」「一行は馬から降り、グレイントはアーサーのところに行つて挨拶した。

「神の加護があるように」とアーサーが言った。「神があなたをよろこんで迎えてくれよう。ニッツの息子エデルンが、あなたの手によってあのやうに惨めな深手を負つてやつて来たとはいへ、あなたの冒険は大成功というものだ。」「その咎はこの私にはなく、」とグレイントは答えた。「ニッツの息子エデルンその人の傲慢によるのです。名前告げようとしなかったのですから。誰であるかが判明するまで、また一方が相手を滅ぼすまでは、到底放つておくことは出来ませんでした。」「騎士よ、」とアーサーが言った。「あなたが誓いを立てたという娘はどこにおる。」「グエンヒヴァルさまと一緒に部屋へ行きました」。

それからアーサーは娘と会うためにやって来た。アーサーと彼の仲間た

ち、そして宮廷中の者が娘を歓迎した。そしてそれぞれの者が、彼女の美しさを示すに相応しいような装いをさせたなら、この娘ほど恵まれて美しい者を見たことがないと思われた。アーサーはこの娘をグレイントに託すことにした。二人の間で当時取り交わされることになっていた契約が、グレイントと娘の間に結ばれた。グエンヒヴァルは、娘の衣装を全て選んでやった。その衣装を身につけた娘を見た者は皆、その美しさと感じのよさに心打たれたのだ。その日は、昼となく夜となく、一同は歌と豊富な食事、様々な飲物や楽しい余興に打ち興じた。そろそろ眠るにふさわしいと思われる頃、皆床に就いた。アーサーとグエンヒヴァルのベッドが置いてある部屋に、グレイントとイーニッドのためのベッドが用意された。そしてこの晩初めて二人は、床を共にしたのだ。朝になると、アーサーがグレイントに代わって、沢山の贈り物を用意して人々を満足させた。娘は宮廷の人々と親しく交わり、周囲の者たちは皆、ブリテン島の中でも、彼女ほどの婦人はいないと考えたのだ。

するとグエンヒヴァルが言った。「わたしの言ったことがびつたり当たりましたね」と彼女が言った。「鹿の首に関して、グレイントが戻るまでは、誰にもそれを与えないようにと言ったはずですよ。さあこれで、この最も名高い娘、インウィルの娘イーニッドがそれを受けるのが一番相応しいことになりました。誰も異存はないことでしょう。彼女に対して、愛と友情以外の気持ちを抱いている者は誰もいないのですから」。これは皆の同意するところとなり、アーサーもそれを認め、鹿の首はイーニッドに与えられた。それ以来彼女の名声はますます高まり、友達も増えていった。グレイントはそれ以後、トーナメント試合と激しい果たし合いを好んで行うようになり、全ての試合で勝利を収めた。こんなふうな一年を過ごし、二年、三年と経って、彼の名声は王國中に広まって行ったのである。

あるとき、アーサーが聖霊降誕節にカエル・スイオン・ウスクに宮廷を構えていると、見よ、雲く傾き、最高の学識があり、雄弁な使者たちがやって来て、アーサーに挨拶した。「神の栄光があらんことを」とアーサーが言った。「神も歓迎して下さるでしょう。ところで、どちらから行らっしゃったのですか?」「私たちは、殿」と彼らが言った。「コンウォ

ール (Cornwall) から参ったのです。私たちはあなたさまの叔父カステニンの息子エルビン (Erbin son of Custinin) からの使いの者なのです。あなたさまへの伝言とご挨拶は、あの方からのものでございます。臣下の者がその主人にするように、叔父が朝に向かって挨拶するというのもいささか異例と思われるのですが、自分は年令が重く感じられる歳になり、力も弱まる老齢に近づいていること、それを知って近隣の人々が国境に迫り、土地と領土を奪おうとしていることを、あなたさまに申し上げてくれとおっしゃっておられます。所領を守り、国境を定かにするために、息子のグレイントに帰って来るよう命じて欲しいと言われるのです。そうしていただけたら、いくら名声を勝ち得てもなんにもならないトーナメント試合にうつつをぬかして、その若い日々を過ごすことよりも、自分の領地を守って過ごす方ずっと良いことを、息子に話してみたいと申されるのです。」「そうですか、分かりました」とアーサーが言った。「行って衣装を取替え、食事をとり、旅のお疲れをおとりなさい。ここをお立ちになる前に、答えを差し上げます」。彼らは食事に出かけて行った。

それからアーサーは、グレイントを自分の宮廷に留めておいたらよいか、宮廷から帰してやらよいかと思ひあぐねた。父親が弱って維持できなくなっているというのに、自分の所領を守り国境の整備をしないでは、立派なことでもよろこばしいことでもないと考えたのだ。グエンヒヴァルと婦人達皆の心配と渴望も大きかった。あの娘が自分たちのところから去って行ってしまふかもしれないからである。その日は昼夜にわたって、あらゆる贅沢をして過ごした。アーサーがグレイントに、コンウォールからやって来た使者たちの役目と使命とを話した。「分かりました」とグレイントが言った。「そうすることによって、どんな都合と都合が私に降りかかってくるのかは分かりませんが、殿。私はあなたの命に従います。」「こんなふうにしては、どうだろう」とアーサーが言った。「行かれてしまうのは私にも悲しいのだが、自分の所領を制圧しに戻り、まずは国境を守ることだ。欲しいだけの仲間を連れて行くがよい。最も好ましく思われる兵隊、自分の家来、そして騎士たちも連れて行きなさい。」「神が報いてくださるでしょう。そういたします」とグレイントが言った。「いったいどんなお話が、」とグエンヒヴァルが言った。「お二人の間で

なされたのですか？ ゲレイントさまが国へ戻るときの兵士たちのことでしょうか。「ああ、そうだ」とアーサーが言った。「わたしも又」と彼女が言った。「一緒に過ごした婦人のために、道中相応しい供の者を揃えてやらねばなりません」「良きに計らうたらよからう」とアーサーが言った。

その晩、一同は眠りに就いた。翌朝、使者たちは出発を許され、ゲレイントも後に続いて出立することが知らされた。それから三日目にゲレイントも出発して行った。彼と共に出かけた人々は次のようである。グワイアルの息子グアルッフメイ(Gwalchmai son of Gwyar)、『アイルランド王の息子リオゴネッズ(Rhigonedd son of the king of Ireland)』、『バーガンディ侯爵の息子オンディアフウ(Onidaw son of the duke of Burgundy)』、『フランスの統治者の息子グワイリム(Gwilym son of the ruler of France)』、『エミール・サダウの息子ホウエル(Howel son of Emyr Llydaw)』、『エリヴリ・アノウ・ケルズ(Elifri Anaw Cyrdd)』、『トリンガドの息子グウィーン(Gwyn son of Tringad)』、『カスティニンの息子ゴレイ、大息をするグウニール(Gweir Big-breath)』、『ユリスメイの息子ガラナウ(Garannaw son of Golihmer)』、『ホウラウグの息子バドレル(Pעדur son of Efrwag)』、『アーサーの宮廷の長老グウィーン・スオゲス・グウィール(Gwyn Ilogell Gwyr)』、『アリン・ダウエドの息子デウィル(Dyfyrr son of Alwn Dyfed)』、『通訳のグウレイ(Gwrei)』、『バドラウドの息子バドウィル(Bedwyr son of Bedrawd)』、『グワイリオン(Cadwri son of Gwriion)』、『ケニールの息子ケイ(Cei son of Cynyr)』、『アーサーの宮廷の執事であったフランク人のオディアルである。』、『そしてニッズの息子エデルンも、』、『とゲレイントが言った。「もう馬に乗れるようになったと聞いておりませう。あのお方にも一緒に来てもらいたいのです。」「何故なのですか？」とアーサーが聞いた。「グエンヒヴァルとの間に和解が成立するまでは、いくら元気になったとはいえ、一緒に連れて行くのはどういふものだろう。」「グエンヒヴァルさまは、保証金を出して、私と一緒に行くことを許してくださいませう。」「もし許すのであれば、保証金なしで自由にしてやるがよい。小人によって加えられた侍女への償いは、あの男が被った苦痛と痛手でもう十分と心得るが。」「わかりました」とグエンヒヴァルが言っ

た。「その件については、あなたさまとゲレイントとの間でそれで良いと申されるのなら、よろこんでそういたします。殿」。そして彼女は、エデルンが自由に出て行くことを許し、ゲレイントは途中で、より沢山の人々を動員して出かけて行ったのである。

このようにして一行は出発し、セヴァーン(Sewern)へ向かっての旅路についた。今まで誰も目にしたことのないような立派な一団であった。セヴァーン川の遠く向こうの側では、カスティニンの息子エルビンの最高の兵士たちが養ひ親を先頭に立てて、ゲレイントを歓迎し、母親と共に宮廷の沢山の婦人たちが、彼の妻であるインウィルの娘イーニッドを出迎えたのだ。ゲレイントが来てくれたことで、宮廷中の人々と領地内の全ての人々が、大変に喜んだ。ゲレイントへの愛と、彼らの許を旅立って以来彼が獲得した名声がそんなにも大きく、自分の領地に戻り困窮を守ってくれるための帰国であったからだ。

彼らは宮廷へ到着した。宮廷の中には、彼らのために、様々な種類の料理、豊富な飲物、濃やかな持て成し、歌や余興の数々が整えられていた。その晩、ゲレイントへの礼を尽くそうと、領地内の全ての貴族たちが集まり、彼の面前に進み出た。その日もその晩も、一同心地よく安らいで過ごした。翌朝まだ早い頃、エルビンは眼を覚まし、ゲレイントと、そして彼と道中を共にしてきた貴族たちをも呼出し、ゲレイントに言った。「私はもう歳を重ねがこたえる老齢になった。おまえと私自身の所領は、今にいたる迄一心に守ってきたつもりだ。しかしもうおまえも立派な一人前の男となり、若さと力を持つようになっていく。今やもう自分一人で、おまえの所領を維持していてもいい。」「ほんとうのところは、」とゲレイントが言った。「私の気持ちから申しますと、あなたの領地支配権を私の手に贈り物としていただいたり、アーサーの宮廷から私を連れ戻したりしてはもらいたくないのです。」「今、おまえの手にそれを委ねる。そして今日、家来たちからの貢物も受け取るがよい。』

するとグロッパフメイが言った。「嘆願書の願いは、今日満たしてやるのが一番です。しかし領地の者からの貢物を受けるのは、明日にするのがいいでしょう。それから嘆願者たちが一箇所に集められた。カデリエイスがやって来て、彼らの意図を吟味し、それぞれどんな願いがあるのか、明

確にしたのだった。アーサーの随員たちが贈り物を始めた。コンウォールからやって来た人たちは、彼らもとても真面目であった。皆熱心に賞物をしたいと思っていたので、開始されるのも間がなかった。何かくれるかと待っていた人々にも、その願いは全てかなえられた。そして昼間も夜も、とても朗らかに、優しく気持ち良く、過ごしたのである。

次の朝早く、エルビンはゲレイントに命じて家来たちへ使者を送り、彼が自ら献上品を受取に行つた方がよいか、それとも彼に対しての何かの不服があり、それを申し立てた方がよいか、どちらが都合がよいかを尋ねさせたのだった。そしてゲレイントはコンウォールへ使者を遣わした。すると自分たちの献上品を、ゲレイントが取りに来てくれたら幸いだというのが、彼らの答えだった。そこでゲレイントは、その場で直ちに献上品を集めることにした。その地で彼らは、共に三晩を過ごした。朝になると、アーサーの随員たちが、出発の許可を願い出た。「皆に行かれてしまうのは、まだ私にとってつらいことです。やって来ると約束した最良の家来たちからの献上品が届くまで、待つてはくれませんか」。そこで彼らは、そうすることにした。それから後、彼らはアーサーの宮廷へ向けて出発した。ゲレイントとイーニッドは、ディンガナン (Dynganan) まで送つて行つた。そしてその地で彼らは別れたのだった。そのとき、パーガンディ候爵の息子がゲレイントに言った。「まずはじめに、」と彼が言った。「所領の境界を訪れ、しっかりとその領域を定めることです。もし何か面倒が生じたら、仲間たちにすぐ知らせして下さい」。「神が報いてくださるように」と彼が言った。「そういたします」。それからゲレイントが自分の領地の境界のところまで出かけて行き、領地内の最高の家来が有能な案内人となって彼の供をした。こうして、自分に示された最も外れにある境界を、しっかりと頭に刻み込んだのだった。

アーサーの宮廷にいたときからの慣習に従つて、彼はしばしばトーナムント試合を行い、前と同様その地でも、最も強い男という名声を勝ち得たのであった。そしてついには、彼の宮廷と仲間や貴族たちのところには、最も上等な馬、最高の鎧、そして最高に素晴らしい宝石が豊かに備えられるようになった。王国内にその名声があまねく広まるまで、それをやめることはなかった。すっかり名声が広まったと知ると、安寧と怠惰を好

むようになった。というのも、彼と戦えるような男が見つからなかったからである。そこで彼は、自分の宮廷の中で、妻と平和をこよなく愛し、歌や余興を楽しんでしばらく過ごしていた。それから、専ら部屋の中で、妻とぶらぶら過ごすことを好むようになった。その結果、そうすること以外に心をなぐさめるものがなくなり、ついには貴族たちの信望や持りのよろこびを見失い、宮廷の随員たちの心を離れさせ、こんなにも完全に一人の女性への愛にのめりこんでいることで、人々の間に忍び笑いやひそひそ非難する声が高まっていったのである。これらの噂がエルビンの耳にまで達し、それを聞いたエルビンはイーニッドにそのことを告げ、ゲレイントをしむけて、自分の家来や随員たちを無視するようにさせたのは、あなたなのかと尋ねたのであった。「神様に誓つて、わたしではありません」と彼女が言った。「そのようなことをさせるぐらい、わたしにとって嫌悪すべきことはありません」。しかし彼女はどうしてよいやら見当がつかなかった。というのも、こんなことをゲレイントに告白することも、また彼に警告することもなくただ聞いていることも、同様に難しいことだったからである。そのため彼女は深く思い悩むことになった。

ある夏の朝、二人はベッドにいた。ゲレイントはベッドの端に寝ていた。イーニッドはガラスのはめこまれた部屋の中で眠られずにおり、太陽の光がベッドの上に差し込んでいた。そのときゲレイントの胸と腕から夜具が滑り落ちた。彼は眠っていた。彼女はこの男の中の大きな美しさを見た目の立派さを認めながら、つくづくと眺めていた。そして言った。「ほんとうに悲しいことです」と彼女が言った。「もし私のために、この二つの腕と胸とが、当然それらのものである名声と誇りとを失いつつあるとしたならば」。すると彼女の涙がさんと流れ、彼の胸の上に落ちたのである。それがゲレイントを目覚めさせた一つの理由、そしてもう一つには、彼女がそのとき口にした言葉であった。すると全く別の考えがゲレイントを苦しめるようになった。彼女がこのように言うのは、自分のことを心配してのことではなく、自分の代わりに他の男への愛に思いをめぐらして、そのために別れたいと思っているのではと考えたからである。この考えでゲレイントの心の平安は失われ、早速執事を呼び出した。彼はすぐにやって来た。「さあ、」と彼は言った。「急いで私の馬と鎧を用意させなさい。

おまえも、」と彼はイーニッドに言った。「起きて衣服を着け、馬を準備させるのだ。持っている中でも、最も不格好な服を用意させ馬に乗るがよい。全く恥ずかしいことだ、」と彼は言った。「もしおまえが考えているほど、私の力がなくなっているかどうかを見極めようとして、その上思っている男と結ばれたいと考えながら、おまえがここにいるとしたらば」。そこで彼女は起き上がり、粗末な衣服を身にまとった。「何を考えなのか、わたしには一向に分かりません、殿」と彼女が言った。「まだ分かるまいな」と彼は言った。

それからゲレイントはエルビンに会うために出かけて行った。「良き人よ、」と彼が言った。「私がしなければならぬ旅があります。何時再び戻れるかは分かりません。そこでお願いですから、父上」と彼が言った。「私が帰るまで、所領の面倒をみて欲しいのです。」「いいだろう」と彼が言った。「それにしても、随分と急に出発するのは驚いたものだ。ところで誰と一緒に旅をするのだね？ おまえはたった一人でソイゲル(Jlogyn)を旅するような身分にはないのだぞ。」「一人を除いて一緒に行く者はおりません。」「神が守ってくださいるように。息子よ」とエルビンが言った。「ソイゲルでは多くの者が、おまえに戦いを挑んでくるだろうよ」。

ゲレイントが自分の馬のところへやって来ると、馬には重く輝く、異国風の鎧が載せられていた。それから彼はイーニッドにも馬に乗るように命じ、十分に距離をとって自分の前を歩くようにと言った。「私に関してどんなものを見、どんな音を聞いても、」と彼が言った。「後ろを振り向いてはならぬ。私が話しかけないかぎり、一言も口をきいてはならぬのだ。彼らを出発した。ゲレイントが行こうとしたのは、平坦な、交通量の多い道ではなく、荒れ果てた、盗賊や盗人そして危険な野獣の出没しそうな道であった。二人は公道に出てそこを進んで行った。森の中から四人の武装した騎士が出て来るのが見え、彼らの姿を見ると、そのうちの一人が言った。「これは良いところに来たものだ。向こうから来る二頭の馬と鎧、そして女までも何なく手に入るとは。たった独り、頭を垂れ、いかにも意気消沈した騎士がついているだけではないか」。この話を耳にしたイーニッドは、ゲレイントに知らせるのは恐ろしいが、一体話しかけるべきか沈黙

を守るべきか、決めかねていたのである。「神様がわたしをお罰しになるでしょう」と彼女が言った。「他の人の手に掛かって死ぬよりも、あの方にそうされたほうがずっと良い。わたしが殺されてしまうようなことになっても、あの方に申し上げよう。気づかずに、あの方が命を落とすかも知れないのだから」。そこでゲレイントが近くに来るのを待ち受けていた。「殿、」と彼女が言った。「あそこにいる男たちが、あなたさまについて言っていることをお聞きになりましたか？」。彼は頭を上げ、怒りを込めて彼女を見た。「おまえは、」と彼は言った。「私が命じたことを守っていけば良いのだ。それ以上は必要ない。おまえの心配は私の上にはないのだから、警告もないというものだ。おまえは私の死を望んでおり、あそこにいる男たちにそうしてもらいたいようだが、私の方はもっとも恐ろしくはないのだぞ。」「そうこうするうちに、男たちの先頭にいた者が、槍を掲げてゲレイントに一撃を浴びせてきた。そこでゲレイントがそれを受け、ちっとも怯まずに一撃をやり過ごし、その騎士の槍の中央を打ったので、槍は碎け鎧は破れ、その結果、人ひとりの前腕の長さ分の柄が体内に刺さり、槍の長さ分も遠くに、馬の尻がいから地面へと叩き落とされてしまったのだ。仲間が殺されるのを見るや、二番目の騎士が怒りに燃えて襲いかかってきた。一撃で前の男同様、叩き落とされた。次にかかってきた三番目の男も同じようにして、殺されてしまった。四番目の男も同様にやつけられた。これを見ていた婦人の心は悲しく沈んだ。ゲレイントは馬を降り、死んだ男たちの鎧一式を取り、彼らの鞍につけて馬の手綱を結び、自分の馬に乗ったのだ。」「おまえの成すべきことが分かるか？」と彼は言った。「この四頭の馬を引き、それを前に置いて前進するがよい。命じたとおり十分の距離を置くのだぞ。私が話しかけぬかぎり、一言も口をきいてはならぬ。神かけて申しつけるが、」と彼は言った。「もしそうしないなら、罰さずにはおかぬぞ。」「できることなら、そういったします、殿」と彼女が言った。「あなたさまの命令に従って」。

彼らは森へ向かい、そこを通り抜け、大きな平原へやって来た。中央には枝を絡ませた木々の茂みがあった。この茂みから三人の騎士が出て来るのが見えた。馬には馬具が着けられ、体にも馬にも十分な装備が整っていた。婦人はしげしげと彼らを見つめた。近くに聞こえてきたのは、次のよ

うな言葉であった。「うまいものを見つけたものだ」と彼が言った。「難なく四頭の馬と四式の鎧が手に入るぞ。あの元氣のない騎士ならば、たやすくやっけることができよう。女もまた手に入れられるとは」「それは本当です」と彼女が言った。「今戦った騎士たちとの試合で、あの方は疲れていらっしやる。警告をして差し上げなければ、神様がわたしを罰することになりましょう」と彼女は言った。そしてゲレイントが近づくの待っていた。「殿、」と彼女は言った。「あそこにいる男たちが、あなたさまのことをどう言っているか、お聞きになりましたか?」「何と言っているのだ?」と彼が言った。「たやすく獲物が手に入るだろうと語り合っているのです。」「神に誓って、」と彼が言った。「男たちの言葉より私の心を重くさせるのは、おまえが私への口を慎まず、命令を守らないことの方だ。」「殿、」と彼女が言った。「そういたしましたのは、あなたさまが知らずに畏にはまってしまうのを恐れたためなのです。」「さあ、口を閉じるがよい。おまえの私への心配など必要ない。やがて一人の騎士が槍をかざしてゲレイントの方へ向かい、力一杯かかってきたが、ゲレイントはそれを軽くかわし、代わって今度はゲレイントが相手の槍の中央を打ち、鎧も役に立たず、馬と人とは飛ばされて、槍の先と柄の部分が体を貫き、腕と槍の長さ分遠くに、馬の尻がいのところから地面に叩き落とされてしまったのである。他の二人の騎士も代わるがわる襲ってきたが、前者同様になされてしまった。婦人はこれを眺めていて、一方では男たちとの戦いでゲレイントが傷つけられないか心配し、もう一方では彼の優勢をみて喜んだりした。それからゲレイントが馬から降り、三式の鎧を三つの鞍につけ、馬の手綱を一緒に結んだ。その結果七頭の馬が彼の手元に残ることになった。

それから自分の馬に跨がり、婦人に馬を引いて行くように命じた。「何の役にもたないのか、」と彼が言った。「黙っておれと命じたところで、言いつけを守ろうとはしないのだから。」「そういたします、殿。わたしが出来ませぬかぎりは」と彼女は言った。「けれど、あの人たちのような異様な方々が、あなたさまについて恐ろしいことを言っておりますのをお知らせしないわけにはゆきませぬ。」「神に誓って、」と彼が言った。「おまえのお節介は無用だ。以後口を慎むがよからう。」「そういたします、殿。わた

しにできませぬかぎりは」。婦人は進んで行き、その前には馬たちが歩き、十分な距離が保たれた。先に述べた茂みを出ると、彼らは広々とした、高く美しい土地に入り、平坦であったり高くなったりする美しい所の旅を続けた。少し前方に森があったが、それは最も近くの端が見えるばかりで、どこから始まり、どこで終わるかも定かでないような、大きな森であった。彼らは森の近くまでやって来た。すると五人の騎士たちが森から出て来るのが見えた。激しい気性の、力強く頑丈そうな五人で、跨がる戦馬は分厚く骨太、大地を蹴り、鼻の穴の大きな立派な馬であり、人にも馬にも十分な装備が整えられていた。近づいてきたこれらの騎士からイーニッドが聞いた言葉は、「見ろ、なかなかの代物だぞ。すぐに手に入れることができよう」と彼らが言った。「馬も鎧も全て、おまけに女もいたかくことにしよう。むこうにはたった一人、意気消沈して、無様な騎士がいるばかりだ」。

婦人はこれらの男たちの言葉にすっかり当惑してしまった。一体全体どうしたらよいか分からなかったからである。けれどやつのことでゲレイントに警告することに決め、彼の方に馬の首を向けた。「殿、」と彼女は言った。「わたしが耳にした向こうの騎士たちの話をお聞きになりましたか? こんなに心配なことはございません。ゲレイントは、皮肉に、苛々した、苦いあざけりの笑顔をあげて言った。「おまえの言葉は聞いたぞ」と彼は言った。「私が命じた全ての言いつけに逆らうとは。あとで後悔することになるだろうよ。するとそのとき、見よ。男たちが彼らに襲いかかってきた。しかしゲレイントは明らかに、堂々と五人に打ち勝ったのだ。それから五人の鎧一式を五つの鞍に着け、十二頭の馬の手綱を一つに結び、イーニッドのところに戻って来た。「私にはもう分からなくなつた」と彼は言った。「一体おまえにこれ以上命じたものかどうか。しかしここにもう一度、おまえへの警告として、わたしの命令を伝えておく。そして婦人は森へ向かい、ゲレイントが命じた距離を保って進んで行った。もし怒りがそうさせなかったとしたら、彼女ほどの立派な婦人が馬の扱いでこれほど苦労しているのを見るのは、彼にとって心痛むことであつたにちがいない。こうして二人は森へと向かって行った。深く大きな森であつた。森の中で夜になった。「婦人よ、」と彼が言った。「もうこれ以上

進むのは止めよう。「はい、殿」と彼女が言った。「あなたさまのお心のままにいたします」「一番よいのは」と彼は言った。「森に入って休むことだ。そして夜明けを待つとしよう」「そういたしましたし、喜んで」と彼女は言った。

彼は馬から降り、婦人を地面に降ろしてやった。「眠る意外に」と彼が言った。「疲れをとる方法はなさそうだ。しかしおまえは馬を見張り、眠ってはならぬぞ」「分かりました、殿」と彼女は言った。そして彼は鎧を身に着けたまま眠った。夜が更けていった。この季節の夜は短かった。明け方の光が美しく差し初める頃、彼女はグレイントが目覚ましたかどうかとあたりを見回した。その気配でグレイントは眼を覚ました。「殿」と彼女が言った。「しばらくしたら、起こして差し上げようかと思っております」「彼は当惑し、黙っていた。というのも、彼女に話すようには命じていなかったからである。それから起き上がり、彼女に言った。「馬を引いてきて」と彼は言った。「進むのだ。昨日のように、距離を置くのだぞ」。

朝になると、二人は森を離れ、晴々とした美しい平原にやって来た。一方の側には草原が広がり、鎌をもった人たちが草を刈っていた。それから川へとやって来た。馬は首を垂れて水を飲んだ。そこで彼らは川岸の高い丘へと登って行った。すると首にタオルを巻いた、細身の少年に出会ったのだった。そのタオルには包みが入っていたのだが、一体何が入っているのかは分からなかった。手には小さな水差しを持ち、口のところにコップがついていた。若者はグレイントに挨拶した。「神の栄光があるように」とグレイントが言った。「どこから来たのかね」「わたしは」と若者が答えた。「あなたの前で見えている町から参りました、殿」と彼は言った。「あなたさまは、どちらからいらしたのかお尋ねしてよろしいでしょうか?」「いい」とグレイントが言った。「向こうにある森を抜けて来たのだ」。「あの森を抜けたのは、今日のことではありませんね」「いいえ、そうではない」と彼は答えた。「そこにいたのは、昨晚のことだ」「そうだと思いません」と若者が言った。「夕べの様子は、あまり良いものではありませんでしたね。食事も飲物もとっておいではならないでしょう?」「それはいいよ。神に誓って」とグレイントが答えた。「わたしの言うこと

をきいて下さいますか?」と若者が言った。「ここにある食事はいいかがでしょう?」「どんな食事だね?」とグレイントが尋ねた。「向こうにいる刈り手たちへの朝食を持って行くところなのです。パンと肉とワインしかありませんが、もしよろしかったら、殿。ただで差し上げます」「いただくことにしよう」とグレイントは言った。「神が報いてくださう」。

グレイントは馬から降り、若者が婦人を地面に降ろしてくれた。彼らは食事をした。若者がパンを切り、飲物を出したりして、全ての給仕をしてくれた。二人が食事を終えると、若者が立ち上がり、グレイントに言った。「殿、お許しをいただき、刈り手たちの食事を取りに行つて参りませう」。「最初に町へ行き」とグレイントが言った。「おまえが知っている中で最高のところに、私と馬たちのための居場所を確保しておくれ。おまえは」と彼は言った。「どれでも馬を一頭選び、鎧と一箱に取っておくがよい。サーヴィスと食事へのお礼だ」「神が報いて下さいますように」と若者が言った。「わたしのしたサーヴィスにとってはそれで十分です。それも十分過ぎる褒美ですよ」。若者は町へ行き、自分の知るかぎり、町中で一番気持のよい住居を確保した。それから宮廷へ出かけて行った。貰った馬と鎧も一緒だった。伯爵のところへやって来ると、自分の遭遇した冒険の全てを語ったのだった。「それでは行って、殿。宿を知らせて参りませう」と彼が言った。「行くがよい」と伯爵が答えた。「そこへ到着したときには、喜んで彼を歓迎し、満足してもらうことにしよう」。そこで若者はグレイントに会いに戻り、自分の宮廷の伯爵が彼を喜んで迎えると言っていることを告げた。しかしグレイントの望むところは、自分の宿に滞在することで十分ということだった。沢山のワラと夜具の準備がなされた気持ちの良い部屋が確保され、馬たちにも十分な場所が与えられて、若者が二人のために豊かな食事を用意していた。

あらゆる衣服に着がえようと、グレイントがイーニッドに言った。「さあ」と彼が言った。「部屋の向こうの端に行き、こちらへは近づかぬように。望みがあれば、この家の女たちを呼ぶがよい」。「分かりました、殿」と彼女が言った。「あなたさまが、そうおっしゃるならのことですが」。そこへこの家の主人がやって来て、グレイントに歓迎の挨拶をした。「殿」と主人が言った。「食事はお済みでしょうか?」「すみました」と彼が答え

た。すると若者が彼に言った。「伯爵にお目にかかりに行く前に、飲物かなにかを差し上げましょうか?」「そうだね、そうしてもらおうか」とゲレイントが答えた。それから若者が町へ行き、彼らに飲物を調達してきて二人は飲んだ。するとすぐにゲレイントが言った。「もう眠気を我慢できない」と彼が言った。「それでですか」と若者が言った。「あなたが眠っておられる間に、わたしは伯爵のところへ行つて参ります。」「ああ、行くがよい」と彼が答えた。「そして、私が呼んだら戻つて来ておくれ。そしてゲレイントが眠りに就き、それからイーニッドも眠つたのだつた。

若者が伯爵のところへ行くと、ゲレイントの宿はどこにあるのかと尋ねられ、彼はその場所を教えたのだつた。「すぐに戻つて、御世話せねばなりません。」「行きなさい」と伯爵が言った。「私からもよろしくと伝え、すぐにお目にかかりに行くと言つて下さい。」「そういたします」と若者が答えた。そこでちょうど彼らが眼を覚ますだらう頃合いを見て、出かけて行つた。二人が眼を覚まし、外へ出て来た。そしてそろそろ食事の時刻と思うとき、食事をとつた。若者が給仕をした。そこでゲレイントがこの家の主人に、誰か客人にしたい人があるかと尋ねたのだつた。「ええ、おります」と主人が答えた。「それではここにお連れ下さい。この町で売っている最高のものを使って、私の費用で接待しましょう。この家の主人が考へる最高の客人が招かれ、ゲレイントの費用を使って持て成された。

すると、見よ、ゲレイントを訪問した十二人の正式な騎士の一人として、あの伯爵がやつて来た。ゲレイントは立ち上がり、歓迎の挨拶をした。「神の栄光がありますように」と伯爵が言った。皆は座り、それぞれ自分の身分に相応しく席を占めた。伯爵がゲレイントに話しかけ、旅の目的はなんなのかと尋ねたのだつた。「心には、ただ、」と彼が言った。「冒険を求める気持ちと、気に入つた探究をすることのみがあるだけです」。すると伯爵はイーニッドを上げしげと見つめ、この婦人よりも美しく、優雅な人を見たことがないと思ひ、すっかり彼女に心を奪われてしまつたのだつた。そしてゲレイントに尋ねた。「あそこにおられる婦人のところへ行き、会話を交わしてもよいでしょうか? あなたとはあまり親しげには見えませんが。」「ああ、いいですとも。よろこんで、そうして下さい」。そこで伯爵は婦人のところへ行き、声をかけた。「御婦人よ、あそこにい

られる方と一緒に旅するのは、あなたにとつてあまり気持ちの良いものとも見えませんが。」「嬉しくないわけではないのです」と彼女が言った。「今はただ、あの方が行らつたところへついて行くまでですわ。」「お供する男も女もないようにお見受けしますが」と彼が言った。「それでですね」と彼女が言った。「下男や侍女がいることよりも、あの方の後をついて行くことの方が、わたしにとってはずっと楽しいのです。」「良い考えがあります」と彼が言った。「私の所領をあなたに差し上げましょう。どうぞ私と一緒に、ここにいて下さい。」「神さまに誓つて、そんなことはできませんわ」と彼女が言った。「あの方に、わたしの真実を最初にお誓ひしたのです。その約束を破ろうとは思いません。」「あなたの考えは間違つておられますぞ」と伯爵が言った。「私があつた男を殺してしまえば、あなたを思いのまま長いこと、自分のものにできるのですよ。飽きてしまえばそれまでのことですがね。あなたの自由意思でそうしたならば、わたしが生きていくかぎり、私とあなたとの間には良い調和が生まれようというものです」。

彼女はこの提案について思いめぐらした。そして心の中で、今は彼の申し出に望みをもたせてやろうと決めたのだつた。「これが最高のことと考へます、殿さま」と彼女が言った。「言つたことに対して信用がなくなるといけませんので、明日ここに行らつたやつて、わたしが何も知らないようになふりをして、連れ出して下さい。」「そうしましょう」と彼は言つた。そして立ち上がり、退出の許しを得ると、家来と共に立ち去つたのである。そのときは、この男の話は何もゲレイントには告げなかつた。彼が腹を立て、心配し、機嫌を悪くするのを避けたからである。

ちよとどよい時間になると、二人は眠つた。夜の始めのうち、イーニッドは少し眠ることが出来た。しかし真夜中になると、彼女は起き上がり、すぐに身に着けられるようにとゲレイントの鎧を整えた。恐れとおののきに震えながら、彼女はゲレイントの寝床の傍らに立つた。そして静かに優しく、声をかけたのだつた。「殿、」と彼女が言った。「起きて、身替いをしてください。このような話を伯爵がしているのです。殿、あの方のお考えはこんなふうなのです」と彼女が言った。そして話の全貌を伝えたのだつた。彼女には腹を立ててはいたものの、彼はこの警告に従い身支度

を整えた。身繕いをするためにローソクを灯すと、「ローソクをそこに置くがよい」彼が言った。「そしてこの家の主人を呼んで来るのだ」。彼女は出て行き、この家の主人が彼のところへやって来た。するとゲレイントが尋ねた。「わたしは借りている金は、いくらになるかね?」。「良きお方、ほんの少しばかりでございますよ」と主人が言った。「どれだけの借りがあるにせよ、十一頭の馬と十一の鎧を選ぶがよい」。「神が報いてくださるように。殿」と彼が言った。「あなたさまのためには、この鎧の一つほどのお金も使ってはおりませんが」。「何がおころうとも、あなたはもっと豊かになるであろう、友よ」とゲレイントが言った。「私を案内して、この町から出してはくれまいか」。「いいでしょう」と彼が言った。「よろこんで、そういたしますよ」。それで、どちらの方向にお出でになりたいのですか?」。「町へ入ってきたのと反対の方へ行きたいのだが」。

そこで宿の主人が案内して、もう道案内もいらなくなるまで、彼を導いて行った。ゲレイントはイーニッドに距離を置いて前を行かせ、彼女はそれに従い前方を進んで行った。宿の主人は家へ戻って来た。家へ入るやいなや、見よ、今までに聞いたこともないような大きな物音が、家の方にやって来るのが聞こえてきた。見ると、見よ、八十人にもほる完全武装した騎士たちが家を包囲し、その先頭にダン伯爵(Dun Eath)の姿があった。「ここにいた騎士はどこにおる?」と伯爵が尋ねた。「おや、」と彼は言った。「ここからずつと先に行ってしまった。お出かけになってから、もうしばらくになります」。「何故だ?この役立たずめ」と伯爵が言った。「わしに何の報告もなしに行かせてしまおうとは」。「殿、」と彼が答えた。「見張りをしておれとおっしゃいませんでしたよ。そのようにうかがっていましたら、行かせはしませんでしたものを。」「どちらの方向に、」と伯爵が尋ねた。「行っと思おうね?」。「存じません」と主人が答えた。「公道を行かれたとは思いますが」。

彼らは公道へと馬の首を回し、足跡を調べ、それを追ってより大きな道へと進んで行った。朝の光が差し初めるころ、イーニッドが後ろを振りかえると、大きな霞のようなものが見え、それが自分の方へずんずんと近づいて来たのだった。彼女は恐怖に震え、あの伯爵と彼の軍隊が自分を追って来たのだと知った。一人の騎士の姿が霞の中から現れた。「ほんとう

に、」と彼女は言った。「あの方がわたしを殺されようとも、警告をすることにしますわ。何の準備もなく、あの方が殺されてしまふのを見るよりは、むしろあの方に殺された方がましです。殿、」と彼女は言った。「あなたさまを襲おうと、あの方がやって来るのがお分かりますか? 大勢の家来たちも一緒です」。「分かっているわ」と彼は答えた。「どんなに黙っておれと命じても、決して守らないと見える。おまえに警告してもらわずとも、私には何の不都合もないのだ。とにかく口をきくな。騎士に向かつてゆくと、最初の一撃で彼を地面に叩き落とした。それから八十人の騎士たちの一人一人に、最初の者へと同様な一撃を与えたのだった。次から次へと騎士に襲いかかり最後に残ったのは、伯爵のみとなった。最後に伯爵が向かって来た。最初の槍を折り、次の槍も折れた。それからゲレイントが彼を攻撃し、楯の中央に槍を投げ、その結果楯はこなごなに砕け、その瞬間鎧も完全に破れ、そのため自らも馬の尻がいから真っさかさまに地面に投げ出され、命も危うくなったのであった。ゲレイントが近づくと、その気配で正気を取り戻した。「殿、」と彼はゲレイントに言った。「お慈悲を」。そこでゲレイントは慈悲をかけてやることにした。投げ飛ばされた地面がひどく固かったためと、受けた打撃があまりにも大きかったために、致命的な激しい傷を受けずに、ゲレイントの攻撃を逃れた者は一人としていないほどであった。

ゲレイントは自分が選んだ公道を進んだ。そして少し距離を置いてイーニッドが進んだ。すると近くに、誰も見たことのないほど美しい谷が見え、側には川が流れていた。川には橋が架かり、公道がその上を走り、橋の傍らには城壁に囲まれた町が見えた。今までに見たこともないほどに立派な町であった。橋の方に近づいて行くと、小さなこんもりと茂った木立の中から、大きく丈も高く、しっかりとした足並で進む、元気な良く訓練された馬に乗った男がやって来るのが見えた。「騎士よ、」とゲレイントが言った。「どちらから行らっしゃったのですか?」。「私は、」と騎士が答えた。「下の谷からやって来たのです」。「さあ、どうぞ、」とゲレイントが言った。「この美しい谷と向こうの城壁に囲まれた町はどなたのものなのか。教えてください」。「よろこんで、お教えしましょう」と騎士が言った。「イギリスの人々にはフランス人の小グウィヴェッド(Gwifred Peit the

French)としてウェールズの人々にはイ・ブレンヒン・ベハン(Y Bre-
nhin Bychan)と呼ばれているお方のものなのです。「私は、」とゲレイ
ントが言った。「向こうの橋の方へ進み、町の下を走る低い方の公道を行
こうと思うのですが。」「それは駄目です」と騎士が言った。「あの方と試
合をすることなく、その橋を渡ってあの土地には行かれませんか。そこを
渡る者には、必ず試合を挑んでくるのですから。」「神に誓って、」とゲ
レントが言った。「その方がいよいよと、私は自分の道を行きま
す。」「衷心からお引き止めいたします」とその騎士が言った。「あなた
がもしそうなさるなら、恥と恥辱があなたを襲うことになりましょう。」「

当然、怒りと燃える心を抱きながら、ゲレントは心に決めた道を進ん
で行った。ゲレントが取った道は、橋から町へ通じる道ではなく、広い
視野をもつ、荒々しく、ひっそりとした、ひどく高い土地の尾根へと続く
道であった。こんなふうにして進んで行くと、力強くしっかりとした、足
並みも確かに歩む、広いひずめと胸をした戦馬に跨がった騎士が、後をつ
いて来た。その馬に乗っているのは、見たこともないほど体の小さい人
で、十分な武器で自分の身と馬との装備していた。ゲレントに近づくと、
彼が言った。「さあ、おっしゃって下さい、殿」と騎士が言った。「私
のしきたりを破るとは、あなたの無知と傲慢によるものなのですか?」

「いいえ、そうではありません」とゲレントが言った。「この道を、人
が通ることを禁じられているとは知らなかったのです。」「知らなかったと
おっしゃるのなら、」と彼が言った。「私と一緒に宮廷へ行らして、償いを
していただくことになりませう。」「お断りいたします」とゲレントが言っ
た。「アーサーがあなたのご主人でないかぎり、あなたのご主人の宮廷へ
は参りませぬよ。」「アーサーの手にかけて、」と彼が言った。「あなたの考
えを改めていただくか、私のほうがあなたから大いに痛めつけられるか
で、執事がそれを交換した。両者は楯の色彩が完全に落ちてしまいうまで、
激しく戦った。ゲレントにとっては、この男と戦うのはなかなか大変な
ことであった。というのも、この男があまりに小さくてねらいを定めるの
が難しく、男の一撃がとも強いものだったからである。馬の膝もガタガ
タになるまで両者は戦い、ついにはゲレントの最後の一撃が、相手を真っ

さかさまに地面に叩き落としてしまった。それから二人は徒歩で戦い、互
いにスピードのある、痛いほど重く、強烈な一撃を加え合い、兜は砕け、鎖
かたばらは壊れ、汗と血潮で視力がなくなるまで打ち合ったのだ。つ
いにゲレントの怒りが爆発し、力を振り絞り、猛々しい勇気を込めて、
素早く敵しい、力一杯の短剣の一撃を、頭のとっぺんに打ち下ろした。これ
が致命的な一撃となり、頭につけていた鎧は壊れ、皮膚と肉を貫いた傷が
骨まで達したため、リトル・キング(Little King)の短剣は手から落ち
てしまった。すると神の名にかけて、ゲレントに命乞いと哀れみを求め
てきたのだ。」「命は助けて差し上げます」とゲレントが言った。「け
れどあなたは礼儀もわきまえず、槍試合もお上手ではない。私に降参し、
二度と再び立ち向かってこないこと。そして私に苦難が降りかかってきた
ら助けるという条件で、助けて上げましょう。」「そう致します、殿。よろ
こんで。そして彼は誓いを立てた。「さあ、殿」と彼は言った。「私と一緒
に、向こうの私の宮廷にいらっしゃって、お疲れをおとりください。」「
神に誓って、そうするわけにはゆきませぬ」と彼が答えた。

それからグウィヴレッド・プティ(Gwifflod Petri)はイーニッドを見
て、彼女のような気高い様子をした女性が、こんなにも苦勞をしているの
を可愛そうに思った。そこでゲレントに言った。「殿、」と彼が言った。
「一息入れて、お休みになるのも悪くはないでしょう。こんな具合でい
ると、何か困難が起これば、それを乗り越えるのは難しくなりますから。」「
しかしゲレントには、ただ自分の旅を続けることしか頭になかったので
ある。そこで、血みどろになりながらも、よろよろしながら馬に跨がった
のだ。婦人は距離を保って前を進んだ。

二人は遠くから眺めていた森の方へ進んで行った。暑さは増し、汗と血
潮で鎧が皮膚にべばりついた。森に到着すると、暑さを避けるために木の
下で止まり、ゲレントは傷の痛みが当初より増しているのに気がつい
た。婦人もまた、別の木の下で休んでいた。すると角笛と人々の集結して
くる音が聞こえてきた。それはこんなわけだったのである。アーサーとそ
の一行が森にやって来ていたのだ。ゲレントは彼らを避けるために
は、どちらの方向へ進んだらよいかと思索した。すると、見よ、徒歩の男
が一人近づいて来た。この男はそこに来ていた執事の家来の一人で、森の

中で見かけた男について報告にやって来た。びっくりした執事は、馬に鞍を着けさせ、槍と楯を持ってゲレイントのいるところへやって来た。「騎士よ、」と彼が言った。「そこで何をしておいでか?」「涼しい木陰で、太陽の熱を避けているのですよ。」「旅の目的はどういうもので、あなたは何方なの?」「冒険を求め、興のおもむくままに旅をしているのです。」「それでは、」とケイが言った。「近くにいらしているアーサーに会い、私と一緒に来てもらおう。」「いいやだめです。神に誓って」とゲレイントが言った。「一緒に来るようにさせてやろう」とケイが言った。そこでゲレイントは、この男がケイであることが分かったが、ケイの方ではゲレイントが分からなかった。そこで出来るかぎり力を奮って、ゲレイントに向かって行った。しかしゲレイントは腹を立て、自分の槍の柄のところで、ケイの顔の下を打ったので、ケイはもんどり打って真さかさまに地面に落とされてしまった。ゲレイントはそれ以上手を出そうとはしなかった。

ひどくびっくりしたケイは、立ち上がり、馬に跨がると、自分の宿舎へ戻って来た。それからグアルッフメイのテントへやって来た。「やあ、友よ」と彼はグアルッフメイに言った。「森の上手の方に、あわれな様子をしたら、傷ついた騎士がいると家来の者が報告してきた。それが本当かどうかを確かめに行くべきだ。」「行くのはかまわないよ」とグアルッフメイが言った。「それでは馬に乗って行くがよからう」とケイが言った。「鎧も着けて行け。自分の行く手を遮る者には容赦なく向かって来るそうさだ。」「グアルッフメイは自分の槍と楯を持ち、馬にまたがって、ゲレイントのいるところまでやって来た。「騎士よ、」と彼は言った。「一体どんな旅を続けておられるのか?」「私の旅を続けているのですよ。冒険を求めながらね。」「一体誰なのか教えてはくれまいか?この近くまで来ておられるアーサーに会いに来てはどうだ。」「誰であるか名乗るつもりもなければ、アーサーに会いに行くつもりもない」とゲレイントが言った。ゲレイントにはグアルッフメイのことが分かったが、グアルッフメイの方では彼が分からなかった。「それでは言うにおよばない」とグアルッフメイが言った。

「誰か分かる前に、私の面前から追ひ払ってやろう。そこで槍を構える」と、彼に襲いかかり、楯に激しい一撃を浴びせ、その結果柄がこなごなに壊れて、馬の頭と頭をすり合わせて戦った。近くでしげしげ見ると、ゲレイ

ントであることが分かった。「やあ、ゲレイントではないか」と彼が言った。「ここに来たというのは、おまえのことか。」「私はゲレイントではない」とゲレイントが言った。「ゲレイントだよ、神に誓って」と彼が言った。

「それにしても、あまりに哀れな様子をしておられる。そしてイーニッドの様子を見、彼女にも挨拶し、よく戻られたと言った。」「ゲレイント、」とグアルッフメイが言った。「さあ、私と一緒に来て、アーサーに会うがよい。おまえの主人でもあり第一の従兄弟でもあられる方ではないか。」「そのつもりはないね」とゲレイントが答えた。「とても出かけて行って、お目にかかるような気分ではないのだ。すると見よ、一人の従者がグアルッフメイを追ってやって来た。グアルッフメイはこの男に、アーサーのところへ行き、ゲレイントがどんなに傷ついて帰って来ているか、しかもアーサーに会いたくないと言っており、とても見ていられない様子であるということ報告してくるよう頼んだのだ。それはゲレイントには知られないようにして、グアルッフメイとその騎士との間で密かに話し合われたことだった。」「それからアーサー様に、」と彼が言った。「道の脇にテントを移してください。」「それからお願ひするのだ。というのも、あの男はとても自分から進んで来るようにも思えず、こんな状態にある間は、無理にそうさせるわけにもゆかないからだ。」「」

そこでその従者はアーサーのところへ行って、そのように報告した。そしてテントを道のすぐ脇へ移したのだ。そこで婦人の心は喜びで一杯になり、グエンヒヴァルがゲレイントを導いて、家来たちが盛んにテントを張っている道の脇の、アーサーの本拠地まで連れて行った。「殿、」とゲレイントが言った。「御機嫌よろしう。」「一体あなたは誰なのだ。」「これはゲレイントですよ」とグアルッフメイが言った。「今日この男は自分の意思では絶対に、あなたには会いには来なかつたのでしよう。」「ああ、」とアーサーは言った。「きつと正気を失っているのだから。するとイーニッドがアーサーのところに行き、挨拶した。」「神のお守りがあるように」とアーサーが言った。「誰か行って、この方を馬から降りして差し上げるのだ。そこで従者の一人が彼女を降ろしてやった。」「ああ嘆かわしいことだ、イーニッド」とアーサーが言った。「これはどんな旅なのだね?」「分からないのです。殿」と彼女が答えた。「わたしに分かつてい

ることは、この方が行らっしゃるところへわたしもついて行くことだけなのです。「殿」とゲレイントが言った。「お許しがいただけるのなら、私たちは出発したいのですが」「一体どこへ行こうというのだ？」とアーサーが尋ねた。「今出かけたなら、すぐ死んでしまうだろう」「どうしても言うことをきこうとしないのです」とグアルッフメイが言った。「私を苦しめることにもなるうよ」とアーサーが言った。「その上、十分に回復するまでは出発させるわけにはゆかない」「私の最大の望みは、殿」とゲレイントが言った。「出発のお許しをいただくことです」「だめだ、神に誓って」とアーサーが答えた。それから一人の侍女を呼んで、イーニッドをグエンヒヴァルの部屋へ連れて行かせた。グエンヒヴァルの婦人たちは皆彼女を歓迎し、乗馬用の衣を脱がせて、他の衣装を着せてやった。そしてアーサーはカディリエイスを呼び、ゲレイントと医者たちのためにテントを張り、その要求に従ってあらゆるものを用意してやるようにと命じた。それからモルガン・ティッドとその弟子たちが、ゲレイントのところへ連れて来られた。

そしてアーサーとその仲間たちは、一箇月の間、ゲレイントの治療を見守ったのである。体が十分に元氣を取り戻すと、ゲレイントはアーサーのところへやって来て、出発の許可を求めた。「本当に充分に回復したかどうかは、まだはっきりしないぞ」「誓って大丈夫です、殿」とゲレイントが言った。「この件に関しては、おまえの言うことより、医師たちの言うことの方が確かであろう」。そこでアーサーは医師たちを呼び寄せ、尋ねてみた。「そのとおりです」とモルガン・ティッドが言った。

朝になると、アーサーが彼に出発の許可を与えた。ゲレイントは自分の旅を全うするために出かけて行った。その日、アーサーもそこから出発しうにと命じた。彼女は言われたとおり、公道を進んだ。こうしてしばらく行くと、近くで世にも恐ろしい悲鳴が上るのが聞こえた。「ここに止まって」と彼が言った。「待っていなさい。行ってこの悲鳴のわけを探ってください」。『かしこまりました』と彼女が言った。ゲレイントは出かけて行き、道の脇の平地へやって来た。この平地には二頭の馬がいて、一頭には男物の鞍が、もう一頭には女物の鞍が着けられていた。鎧を着けた騎士の

方は死んでおり、その騎士の脇に、乗馬用の衣装を身に着けた品のよい娘が立っていて、激しい叫び声を上げているのだった。「さあ、御婦人」とゲレイントが言った。「一体どうなされたのですか？」「わたしの最愛のお方とこうして旅をしておりますと、三人の巨人が襲いかかり、この人にいささかの正義も示さず、殺してしまったのです」「して、彼らはどちらの方角へ行きましたか？」とゲレイントが尋ねた。「公道に沿ったあちらの道を行きました」と娘が言った。ゲレイントはイーニッドのところへ戻って来た。「さあ」と彼は言った。「あそこにいる娘のところへ行って、私が戻ってくるまで待っているのだ」。そのように命じられ、彼女は悲しかったが、それでもその娘のところへ行き、彼女の話を書き胸を痛めた。そのとき彼女はゲレイントがもう戻っては来ないように思えてしかたがなかったからである。

彼は三人の巨人の後を追ひ、襲いかかった。彼らはいずれも三人分の男以上の大きさがあり、それぞれ肩から大きな棍棒を下げていた。一人に襲いかかると、体の中央を槍で刺し貫いた。その槍を抜くと、もう一人も同じように刺した。しかし三番目の男が振り返り、棍棒で打ちかかってきたので、ゲレイントの古傷が口を開け、全ての血潮が溢れ出て来てしまった。そこでゲレイントは剣を抜き、巨人に襲いかかり、頭上にするどく、力強く、恐ろしい一撃を浴びせ、その結果、巨人の頭と喉は肩のところまで裂け、死んで地面に崩れ落ちたのだった。こんなふうにしてゲレイントは、三人の巨人を殺して、イーニッドのところへ戻って来た。イーニッドを見ると、死んだようになって馬から地面へ崩れ落ちた。イーニッドは恐ろしい叫び声を上げると、彼が横たわっているところへ駆け寄り、その体の上に身をかがめたのだった。

すると見よ、この道を旅していたリムリス伯爵(Earl Limwris)とその一行が、この叫び声を聞いてやって来て、イーニッドに言った。「ご婦人よ」と彼が言った。「どうなされたのですか？」「良きお方、わたしが今まで、そしてこれからも最も愛しているお方が殺されてしまったのです。」「して、あなたの方はどうなされたのですか？」「わたしの最愛の人にもまた殺されてしまったのです」と娘が答えた。「誰にやられたのですか？」と彼が聞いた。「巨人たちに」と彼女が言った。「わたしの最愛の人が殺さ

れ、もう一人の騎士が彼らの後を追ひ、ご覧のようにここへ戻つて来たのですが、このように血を流しているのです。思うに、」と彼女が言った。「あの人たちの何人か、又は全てを殺していらしたにちがひないのです」。伯爵は死んでいる騎士を埋めてやった。しかしゲレイントにはまだ生気が残っていたため、楯の窪みの上に置き、棺台に載せて、生き残れるかどうかを見定めるために連れ帰つたのであった。

二人の女性たちが宮廷へやつて来た。彼らが宮廷に到着した後で、棺台の上に載せられたゲレイントが、慣習に従つて、大広間のメインテーブルへ置かれた。一同は外出用の衣服を脱いだ。伯爵がイーニッドに、別の衣装に着がえるようにと言つた。「いいえ、結構です。神様に誓つて」と彼女は言つた。「さあ、婦人よ、」と彼が言つた。「そんなに不幸せそうな様子をなさるな」。『そのような御忠告に従ふことは、難しいことでございませぬ』と彼女が言つた。「そんなに不運と思われれることはないと思つて居るのです。生きようが死のうが、それはその騎士の運命です。ここに素晴らしい伯爵領があり、それを私と共に手に入れることも可能なのですから」と彼が言つた。「これからは一緒に楽しく過ごそうではありませぬか。』神様に誓つて。これから先、わたしが楽しく暮らすことはないでしよう」と彼女が言つた。「わたしの命があるかぎりには。』こちらに来て食事をして下さい」と彼が言つた。「いいえ、結構です。神様に誓つて。』そうしていただきますよ、神に誓つて」と彼が言つた。そして彼女をその意思に反して、無理やりにテーブルへ引つ張つて行つて、再三彼女に命じたのだつた。「食べませぬ、神様に誓つて」と彼女は言つた。「その棺台の上におられる方が、そうされぬかぎりには。』それでは事態は良くありませんよ」と伯爵が言つた。「あそこにいる男は、ほとんど死んでいるのですから。』そうかもしれません。でもためしてみたいのです」と彼女が言つた。伯爵はなみなみと注いだ飲物を、彼女に差し出した。「この杯から飲んでごらん下さい」と彼が言つた。「そうすれば、考えも変わるかもしれません。』被服なことで」と彼女が言つた。「この方が飲む前に、このわたしが口にしたら。』これでもう、私の堪忍袋の緒も切れたというものです」と伯爵が言つた。そして彼女の横面を平手で張り倒したのだつた。彼女は絹を裂くような鋭い叫び声を上げた。その声は前よりもずっと

大きなものだった。というのも、ゲレイントが生きてさえいれば、このような平手打ちには食うまいという思いが胸に溢れてきたからだつた。彼女の叫び声に共鳴するかのようになり、ゲレイントが意識を取戻し、上半身を起すすと、楯の窪みにあつた短剣を取り、急いで伯爵のいるところへ行き、鋭く、悪意を込めた、強力な一撃を彼の頭上に浴びせた。その結果、彼の額は真つ二つに裂け、剣はテーブルに達するほどだつた。一同は皆、テーブルを離れ逃げ去つた。襲いかかつてきたのが生者であれば、そんなにも恐れはしなかつたのだが、死者が襲いかかつてくる恐怖はたとえようもなかつたからである。それからゲレイントはイーニッドを眺め、ふたつの理由で胸を痛めた。一つにはイーニッドの美貌がこんなにも衰えてしまつたことを知つたためであり、もう一つには、そのとき初めて、イーニッドの方が正しかつたことが分かつたからであつた。「婦人よ、」と彼が言つた。「私たちの馬はどこにいるか分かるかね?」。『はい、』と彼女が言つた。「あなたの馬が行つたところは分かつております。けれども頭がどうなつたかは分かりませぬ。あなたの馬ならば向こうの家に入つて行つたのですが。』彼はその家に行き自分の馬を引き出すと、それに跨がり、イーニッドを地面から抱き上げると、自分と鞍頭の間に乗せたのである。そして二人は出発した。

このようにして二つの生け垣の間を抜けて進んで行き、夜も訪れようとしたとき、見よ、槍の柄が弧を描きながら追つてくるのが見え、馬のひずめと軍団の音とが聞こえてきた。「誰かが後を追つて来たようだ。おまえは生け垣の向こうに隠れておいで。』そしてゲレイントはイーニッドをそこに降ろした。すると見よ、一人の騎士が彼に向かつて来た。その姿を見ると、イーニッドが言つた。「殿、」と彼女が言つた。「たとえ何者であれ、死人を殺して何の栄光となりませぬ。』ああ悲しいことです。神よ」とその男が言つた。「あの方はゲレイントですか?」。『そうです、神様に誓います。』ところで、あなたは何方ですか?。』私はリトル・キングです。』と彼は答えた。「あなたの手助けをしなければなりません。どんなふうにして苦難がお二人を見舞つたか聞いたためです。私に言つて下さつたら、このようなことにはなりませんでしたのに。』何もできなかったたであらう」とゲレイントが言つた。「神の望むことだつたのだ。話せば良い結果

が得られたかも知れぬが」と彼はつけ加えた。「そうですね」とリトル・キングが言った。「今となつては私の勧めめるのは、この近くにある私の義弟の宮廷に、私と一緒にいらつしやることです。この国の最高の方法で、あなたの治療ができるでしょう。」「よろこんで、参るとしよう」とゲレイントが言った。イーニッドはリトル・キングの家の馬の頭に乗り、この男爵の宮廷へとやって来た。一同は歓迎を受け、世話と手当てがなされた。翌朝医者呼びにやられ、まもなくやって来た。それからゲレイントは、すっかり元通りに回復するまで看病を受けた。ゲレイントが治療を受けているあいだ、リトル・キングが彼の鎧を修理させ、それが最高の状態にあったときと同じように直された。こうして一箇月と二週間、彼らはここに滞在したのである。

それからリトル・キングがゲレイントに言った。「さあ、わたしの宮廷へ行って、楽しくやろうではありませんか。」「よろしければ」とゲレイントは言った。「もう一日旅を続けて、それから戻って参りたいのですが。」「よろしい」とリトル・キングが言った。「行っていらつしやい。そこで朝早くふたりは出発し、イーニッドはその日、いままでよりずっと楽しく、喜んでついて行つた。二人が公道にやっていると、そこで道は二つに分かれていた。一方の道から徒歩の男が近づいて来るのが見えた。グウィヴレッドが一体どこから来たのかと尋ねた。「国の中、使いのためにやって来たのです。」「教えてくれませんか」とゲレイントが言った。「これらのうちの、どの道が旅するのにふさわしいと思われませんか。」「あちらの道を行つた方がよいと思います」と彼が言った。「こちらの道を進まれば、生きては戻れずまい。下の方に、霧の垣根があつて、その間で魔法にかけられた試合がおこなわれていて、ここを行つた者は皆帰つては来ないのです。向こうにはイウ・エイン卿(Earl Ywein)の宮廷があります。その宮廷に行かないと、誰一人として町に滞在することはできません。」「神に誓つて」とゲレイントが言った。「私たちはこの下の方の道を行きますよ。』

彼らはこの道を進み、町に入ると、一番立派なところに宿をとつた。すると見よ、若い郷士がやって来て彼らに挨拶した。「神のお守りがありませうように」と彼らが言った。「良き方々」と若者が言った。「ここにいら

した目的は何なのですか?」「宿をとつて、一夜を過ごしたいのです。」「この町の持ち主は、自分から宮廷へやって来ないかぎりには、この町の人々の間で宿をとることは、許さないことにしておられるのです。どうぞ宮廷へ行らしてください。」「よろこんで参りましょう」とゲレイントが言った。そこで彼らはこの郷士と一緒に宮廷へ出かけて行き、快く迎えられる。伯爵が挨拶にやって来て、食事の準備をするように命じた。彼らは手を洗い、席に着いた。彼らは次のように席を占めた。ゲレイントが伯爵の隣に座り、もう一方の側にはイーニッドが座つた。イーニッドの脇にはリトル・キングが、そして伯爵夫人がゲレイントの脇に座つた。その後で、全ての人がそれぞれ相應しい順序で席を占めたのであつた。

やがてゲレイントは試合のことを思いめぐらした。とてもその試合に出かけて行くことなど許されなからうと考え、食事の手も止まりがちになつた。伯爵はゲレイントを見、彼の食事が滞りがちなのも、試合に行きたいからだろうと考えた。彼はゲレイントのような優れた騎士を失うことにはかならない試合の数々を、今まで設けてきたことに心を痛めたのだ。もしゲレイントがその試合を止めたいのなら、これからは永遠にそれを止めてもいいとも考えた。そこで伯爵がゲレイントに言った。「何を考えておいでなのですか、殿、食事が進まないようですが。試合のことを考えてのことなら、行かなくとも結構です。あなたの名譽のために、これからは誰もそうしなくてよいようにいたしましょう。」「神の報いがありますように」とゲレイントが言った。「考へるのは試合に行くことばかり。早くそこへお連れ下さい。」「そうすることが一番の望みなら、よろこんでそういたしましょう。」「全くのところ、それが一番の望みなのです」とゲレイントが答えた。一同は食べ、十分な給仕と、様々な食べ物と豊かな飲物を楽しんだ。食事が終わると、一同は立ち上がり、ゲレイントは自分の馬と鎧を持って来させ、身支度を整えた。皆生け垣のところまでついて来た。生け垣の下の方には、空に突き出た頂上の一点が見えるばかりであつた。生け垣の中に見える杭の一つひとつには、二つのものを除いて全ての杭に、人の首が掛けられていた。生け垣の中、そしてそこを抜けて立てられている杭の数には限りが無いように見えた。それからリトル・キングが言った。「この方自身の他に、誰かついて行くことが許され

ていますか?」「いいえ、許されてはおりません」とイウエイン卿が言った。「ここからはどの方向を目指して行ったらよいのでしょうか?」とゲレイントが尋ねた。「分かりません」とイウエインが言った。「最も行きやすい方へ行ってください」。

何の恐れもなく、真っ直ぐに、ゲレイントは霧の中へ入って行った。霧を抜けると、大きな果樹園があり、その中に開けた土地があるのが見えた。中央には赤い天井のついた、絹の錦織でできた大きなテントがあった。その入口が開いているのが目に入って来た。入口の反対側には、一本の林檎の木があり、枝には大きな狩猟用の角笛が掛かっていた。ゲレイントは馬から降りて、大テントの中に入って行った。テントの中には、寂しげな娘が一人、黄金の椅子に座っているのを見た。彼女の反対側には、空っぽの椅子が置かれていた。ゲレイントはその空いている椅子に腰を下ろした。「殿、」と娘が言った。「どうぞその椅子には座らないで下さい。」「一体何故ですか?」とゲレイントが尋ねた。「この椅子の持ち主がそれを嫌われるからです。」「かまひはしませんよ」とゲレイントが言った。自分の椅子に座られて気を悪くされたって、ちっともかまひません。すると大きな物音が、大テントの近くから聞こえて来た。一体どうしたのかと、ゲレイントが目を見ると、大きな鼻の穴をして立派な装備を着けた、元気がよく体格も優れた戦馬に跨がった騎士が、自分の体と馬をすっぽり覆う外套を身に纏い、すっかり装備を整えて、外に立っているのが見えた。「殿、一体誰がその椅子に座るのを許したのですか?」「私自身が許したのです」とゲレイントが答えた。「私にそんな恥をかかせるのは困ったことです。さあ、すぐに立って、自分の浅はかさの償いをするのです。そこでゲレイントは立ち上がり、両者はすぐに戦いを始め、二人は槍の一セットを折り、つぎの一セットも、三番目のセットも折り、お互いに激しく素早い一撃を浴びせ合った。ついに怒りに燃えたゲレイントが、馬に拍車をあて、騎士をめがけて突進し、一番丈夫そうな楯の部分を打ち、その結果楯は砕け、槍の先が鎧に食い込み、鞍の付帯物も破れ、騎士自身も馬の尻がいのところから、ゲレイントの槍と自分の腕当ての分までも遠くの地面に投げ飛ばされてしまった。すぐにゲレイントは剣を抜き、騎士の首を打ち落とそうとした。「ああ残念ですが、殿」と騎士が言った。

「お情けをたまわりたい。何でもお望みのものを差し上げます。」「何も欲しくはありません」とゲレイントは答えた。「望みといたら、最早試合を行わず、今まであった霧の生け垣も、呪いも、魔法も終わりにしていただくことです。」「お望みとあれば、よろこんでそう致しましょう、殿。」「そうして下さい」とゲレイントが言った。「この地から霧を払うのです。」「そこに掛かっている角笛を吹いてください」と騎士が言った。「あなたを吹くやいなや、霧は晴れます。私を討ち負かした方がそうしなにかぎり、絶対に霧は晴れないことになっています」。

自分の置かれたところで、イーニッドはゲレイントのことを心配し、心を痛めていた。するとゲレイントがやって来て、角笛を吹き鳴らした。一吹きするやいなや、即座に霧は消えた。一同が集まって来て、それぞれ仲間間の間に平和が訪れた。その晩伯爵は、ゲレイントとリトル・キングとを招待した。翌朝早く彼らは別れ、ゲレイントは自分の領地へと帰って行った。そしてそれ以後ずっと、彼はその地を立派に治め、彼とイーニッドの人柄と勇氣と力とは、彼らの名声と共に広がり、皆の知るところとなったのである。

II

(一) 構成について

様々なエピソードが挿入されている複雑な物語ではあるが、全体は大きく次のように分類して考えることができる。

1. アーサーの宮廷をめぐる世界で。
 - a 白い鹿を狩りに。
 - b 狩りに遅れる二人。―王妃グエンヒヴァルとゲレイント。
 - c 小人によって加えられた王妃の侍女への侮辱。
 - d ゲレイントによる雪辱の旅 ―小人・娘・騎士の一行を追って。
 - e ハイタカをめぐる槍試合での勝利。―イーニッドを意中の貴婦人として。

- f 王妃の許しを乞いにやってくる「鷹の騎士」。
- g 白い鹿狩りをめぐって。
- h 宮廷に戻ってくる二人。―ゲレイントとイーニッドの結婚。
- i 白い鹿の首を受けるイーニッド。

2. アーサーの宮廷の外の世界で。

- a 父の所領コンウォールへ帰るゲレイント。
- b 嫌疑に囚われるゲレイント ― 悲運の妻イーニッド。
- c 探究の旅の始まり。
- 1 四人、三人、五人の騎士を倒して。
- 2 ダン伯爵のイーニッドへの横恋慕。
- 3 リトル・キングとの戦い。
- 4 アーサーの騎士たちとの出会い。―身分を否認するゲレイント。
- 5 三人の巨人を倒して
- 6 リムリス伯爵のイーニッドへの横恋慕。―イーニッドの真実に目覚める。
- 7 イウエイン伯爵の宮廷で。
- 8 最後の戦い。―霧を払い魔法を解除するゲレイント。
- 9 帰郷。

(二) テーマについて

1. 探究

主人公の若者ゲレイントが負けることを知らない強者であることは、その戦いの様をみれば明らかである。まさに行くところには敵がないと言った勇猛果敢な騎士である。その上、最初の登場のシーンからも明らかのように、金の柄の付いた剣を差し、四隅に金色の林檎の縫い取りが施された青紫のマントを羽織るその姿は、王妃グエンヒヴァル

に最高の道連れと言われるのも領けるような、初々しくセンスの良い若い騎士である。このように美しく、見た目の立派な男が、自分への愛に溺れて仲間づきあいをしようとせず、ぶらぶらと屋内に閉じこもって暮らすようになったことを見て、さめざめと涙を流す妻イーニッドの悲しみも、容易に想像できるところである。その嘆きをどう誤解したのか、妻が自分以外の愛人を持っていて、その男への思いのために悲しんでいるという嫌疑から、ゲレイントの旅は始まっている。

確かに、探究の旅(Quest)へ出かけたいと父親に語るゲレイントではあるが、一体何の探究であるかは一向にはっきりしない。その旅の目的を尋ねられたイーニッドが、「わたしに分かっていることといったら、ただこの方の行かれるところにお供することだけです」と答えることから、従来の探究の旅、例えばウェルズの最初の「アーサー王物語」と考えられている「キルーフとオルウェン」(Culhwch ac Olwen)の中の、継母の呪いの言葉の中に登場した幻の乙女オルウェンを妻に求めて、と言った若者キルーフの嬌恋の旅などは根本的に異なっている。また同じく「フランス風のアーサー王ロマンス」に属する「エヴラウグの息子ペレドルの物語」(Historia Peredur vab Eirafwg)に見られる、正当な領地統治権を持つ妻の喪失により、荒れ果ててしまった土地を元に戻そうとする失地回復を求めての旅でもない。一人の男の嫌疑から起こった、じめじめとした個人の不満を晴らす旅となっているのが分かる。何とも後味の悪い物語と言っても過言ではない。

そんな印象を増幅させるのが、絶えることなく繰り返される試合や一騎討ちの描写である。しかもそれが、受けた傷の様子や流れる血潮を、これでもかこれでもかと言う具合に繰り返し描写されると、陰惨さがいやましてきて、早く終わってほしいと願う悪趣味なものになってしまう。美しい女性と見れば、安易な方法で手に入れようとする騎士たち、ゲレイントの不興をかけていることが分かったり、保護者が瀕死の状態にあるのいいこととして横恋慕する貴族たちという、いずれも品性劣悪な男たちの姿が描かれる。「強きを挫き、弱きを助け、婦人

を敬う」という騎士道精神も地に落ちたりと言う始末である。確かに旅の終わりに到れば、執拗なグレイントの疑いも溶け、魔法のかかった土地の霧は晴れて、妻と夫はめでたく自分の国へ帰ってゆくのではあるが、何ともすっきりとしない後味を残す物語である。

2・悲運に泣く妻たち

『ペジノーギ』の核となっている、「マビノーギ」の四つの物語」(‘Pedair Keinc y Mabinogi’)の第一話に登場してくる、異界の霧を色濃く漂わせる美女リアンノン(Rhiannon)の悲劇から始まって、第二話の女主人公ブランウェン(Branwen)等、ケルトの物語に登場する妻たちの悲運の話は後を絶たない。しかし同時にそこには、自らの手で運命に戦いを挑む果敢な妻たちの姿がある。リアンノンの登場のシーンから既に明らかのように、彼女の旅の目的は意中の男性プウイス(Pwyll)への求婚であるし、一旦は彼の不用意な一言のために、折角準備された結婚の宴を先送ることにはなるが、リアンノンの機転によって、二人の結婚は一年の期間を置いた後成就される。また侍女たちの偽証によって子殺しの罪に問われはするが、沈着冷静な彼女の判断によって、産んだ子どもブレデリ(Pryderi)は、時が満ちるとめでたく養い親の手から、両親の元に戻されるのである。あくまで物語を導いてゆくのは、苦境に陥っても決して諦めないという女性の力であることは、明々白々な事実となっている。

異国アイルランドに興入れしたブリテン島第一の美女ブランウェン。彼女の悲劇はこのリアンノンとは異なり、受け身的なものである。頼り甲斐のある巨人の兄ベンディゲイドブラン(Bendigeidfran)と共に、一族の中の問題児である異父兄エウニシエン(Efnisien)を係累にもったという悲劇も加わっている。異国妻であることから、夫の側近たちに計られて故郷との連絡を一切絶たれてしまっても、彼女は知恵を巡らし、一羽のムクドリを訓練して、自分の苦境をウェールズのベンディゲイドブランに伝える努力を放棄することはない。

一方これら二人のケルトの女性たちに比べて、この物語に登場するイーニッドの、完全に受け身的な忍従の姿には、男性たちに一歩も引かず、自らの運命、そしてその地域や民族の運命をも変えようと努力する一人の独立した人間としての女性の姿は感じられない。グレイントとイーニッド、この二人の夫婦の悲劇は、言ってみれば、問題の所在を明らかにし、それと真向から立ち向かいつつ、解決を計ろうとはしない妻イーニッドの優柔不断さから生じているとも言えるのである。彼女が終始心配しているのは、夫の機嫌を損じるのではということであり、そのために自分も雪だるま的に解決不能の深みにはまってしまうことに気がつかない。

ここに新しい忍従の女性像が、ケルト文学の中に導入されたことが分かる。そしてそれと反比例するように、宮廷の中で権力を行使する偉大な女王、アーサーの王妃グエンヒヴァルの姿がクローズアップされてきているのも極めて印象的である。

おわりに

以上見てきたごとく、『マギビーノ』の中に現れる、アーサー王伝説にまつわる物語の最後に位置する、この五番目の物語「エルビンの息子グレイントの物語」は、その主人公グレイントから始まって、その大部分の登場人物は、皆ウェールズの古い歴史や伝説、そして他の物語でお馴染みとなっている人たちである。完全にケルトの起源と目されている霧の包囲や、大テントの中の空席、リンゴの樹に掛けられた魔法の角笛、宗教色の全く感じられない結婚等ウェールズ固有の伝統や慣習への言及もある。物語の主題としてうたわれている探究の旅や悲運の妻たち等のモチーフもまたケルトのものである。

しかしながらその一方で、微に入り細にわたった装飾馬具や鎧の描写、執拗に繰り返される一騎討ちの様子、定式化された挨拶で始まる会話等の部分からは、直截的で力に溢れた、ウェールズ物語文学の語り

口の魅力が大幅に失われ、生き生きとした劇的な力のようなものは完全に影を潜めてしまっている。大袈裟な形容詞や副詞の使用は、この前に置かれた第四番目の物語「エウラウグの息子スレドルの物語」から顕著になってくる特徴であるが、この物語において、誇張された大仰なノルマン系フランス風の文体が完全に勝利を治めていることが分かる。まさに「ここにはウェールズのロマンス文学の最後の名残と、その固有の文学的技術を凌辱するノルマン・フランス風の形式美の勝利の姿を見ることができ(4)」という指摘も頷けるところである。

それに呼応するごとく、一応はカエル・スイオン・ウスクとかカエルディーズといったお馴染みの場所が示されているとは言え、それはほんの付けたりのような印象に止まり、それまでは常に現存する一つの土地に展開されていた物語の舞台も、どこにでもあり、結局どこにもないような緩味な設定に変化してしまっていることが分かる。

多用されるフランス語系の言葉や、中世の宮廷の行事等への言及から、物語の成立の時期はノルマン征服(一〇六六年)以後であることは確実である。多分十二世紀頃までノルマンディー地方に保存されていたケルトの物語から、クレティアン・ド・トロワ等の詩人たちが書いた韻文詩などの影響を受けつつ、十三世紀の後半から十四世紀にかけて今のような形にまとめられたと考えられている物語である。

注

(1) 本稿は、私の論文「『マビノーギ』研究(1)〜(4)」(山梨英和短期大学「紀要」第十九号〜二十四号(一九八五〜九〇年)、並びに大妻女子大学「紀要—文系—」第二十四号〜二十七号(一九九二〜五年))に続くものである。

(2) Roger Middleton, 'Chwedl Gereint ab Erbin' in Rachel Bromwich et al. (eds.) *The Arthur of the Welsh: The Arthurian Legend in Medieval Welsh Literature* (Cardiff: University of Wales Press, 1991).

(3) 使用テキストは主として、
A. ウェールズ語版

1. J. Rhys & J. Gwenogvryn Evans (eds.), *The Text of the Mabinogion and Other Welsh Tales from the Red Book of Hergest* (Oxford: Clarendon Press, 1887).

2. J. G. Evans (ed.), *The White Book of Mabinogion* (Pwllheli: printed by the editor, 1907).

B. ウェールズ語並びに英語版

Lady Charlotte Guest, *The Mabinogion from the Llyr Coch Hergest, and Other Ancient Welsh Manuscripts, with an English Translation and Notes* (London: Longman, Brown, Green and Longmans, 1839).

C. 英語版

Gwyn Jones & Thomas Jones (trans.), *The Mabinogion* (London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1949), p. 49.

但し、翻訳本文中の人名ならびに地名の表記は、G. Jones & T. Jones (trans.): *The Mabinogion* に使用されている現代ウェールズ語表記を用いている。

(4) T. P. Ellis M. A. & John Llodyd M. A. (trans.), *The Mabinogion* (Oxford Clarendon Press, 1929), Vol. II, 'Introductory Note to Gereint and Enid', p. 188.